松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈2〉

土塩下原遺跡

1 9 9 2

松井田町埋蔵文化財調査会

序文

松井田町は群馬県の西の玄関口として、古くより交通の要衝地となっております。古代においては東山道、そして近世に整備された中山道、さらにはわが国唯一のアプト式鉄道による碓氷峠越えなど、本町の歴史はまさに交通の発達とともに創られてきたと言えるでしょう。現在、主要幹線として機能する国道18号線碓氷バイパスや旧道碓氷峠においても、平成5年3月に開通する上信越自動車道によってその座をあけ渡し、このこと一つを見ましても歴史がさらに新しい歴史を築いてゆくことに深い感慨をおぼえるものであります。また、今に生きる私たちの辿ってきた道筋は、常に先人の築き上げた文化を礎として成り立っているものであり、このことを踏まえて文化財を未来へつなげてゆくべき遺産であると考えます。

さて、このたび研究所建設にさきだって該地の埋蔵文化財発掘調査を実施した結果、縄文時代中期の遺跡が発見され、ここにその調査報告書を刊行する運びとなりました。消えていった遺跡の記録として、本書が地域の歴史を解明する一つの手だてとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に参加された方々、ならびに本書作成にあたって多くのご協力をいた だきました関係各位に厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成 4 年12月

松井田町埋蔵文化財調査会

会長武 田 弘

- 1 本書は(株)ヤナセアンドアソシエイツの研修センター等建設に先立ち調査した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字土塩760他に所在する。
- 3 調査は(株)ヤナセ の委託を受けて松井田町埋蔵文化財調査会が行なった。
- 4 調査費用は試掘調査を松井田町教育委員会、本調査を(株)ヤナセ ―― が負担した。
- 5 調査期間は、発掘調査)平成3年9月18日~11月15日 整理作業)平成4年1月6日~12月25日である
- 6 発掘調査は田口 修(調査会事務員)が担当し、整理作業では田口とともに大野ひろ子と都丸 孝江がこれに従事した。
- 7 本書の執筆、編集は田口が行なった。
- 8 石器(主に石斧)は菅谷みのぶ氏に実測して頂いた。
- 9 石器の石質は小林二三雄氏に鑑定して頂いた。
- 10 出土遺物、資料類は当調査会の委託により松井田町教育委員会が一括して保管している。
- 11 発掘調査及び整理作業においては以下の方々より御教示、御協力を頂いた。(敬称略) 伊藤正雄(株式会社東日本重機)、上原富次(松井田町文化財調査委員)、佐藤義一(同) 大工原豊(安中市教育委員会)、千田幸生(山武考古学研究所)、福山俊彰(同) 水沢祝彦(松井田町役場)、西横野保育園、(旬グリーン測量設計
- 12 発掘調査参加者(敬称略)

石井きち、岩井道子、大野ひろ子、金井綾子、小板橋百合子、鈴木百合子、都丸孝江 野田絹子、矢野由利子、岩井儀一、斎木恒男、野田達也

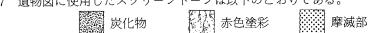
凡例

- 1 遺構図の縮尺は原則として1:40である。
- 2 遺構図中の方位記号は座標北を示す。
- 3 遺構図に使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



- 4 遺構図中、断面の基準線は海抜標高を示す。
- 5 調査区における2m四方のグリッド番号は、各グリッドの北隅ポイントの名称を使用した。

- 6 遺物図の縮尺は1:3、1:4とし各図に記した。
- 7 遺物図に使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



- 8 写真図版における遺物写真の縮尺は不統一であるので実測図を参照されたい。
- 9 本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序	文	
例	言・凡 例	
第1章	発掘調査に至る経緯	1
第2章	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
]	I 発掘調査の方法 ····································	1
Ι	Ⅰ 発掘調査の経過	2
Ι	■ 整理作業の経過	2
第3章	遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
]	[地理的環境	3
Ī	I 歷史的環境····································	3
Ι	Ⅲ 基 本 層 序	6
第4章	検出された遺構と遺物	7
<u>.</u>]	[概 要 ··································	7
I	【 各調査区の様相 ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯	
	1. 1区 8 5. 5トレンチ 2	25
	2. 2区 9 6. 8トレンチ 2	26
	3. 3区	26
	4. 4区	28
Ι	Ⅲ 遺 物	
	1 土器	
	2 石器	
第5章	ま と め	Į7
抄	録	
写真図	図版	

図版目次

表 図 版

図 1	周辺遺跡 (遺物) 分布図	4	表1	整理作業表	2
図2	基本層序模式図	6	表2	周辺遺跡の概要	5
図 3	調査区域配置図	7	表 3	2 区 1 号住居跡出土遺物観察表(土器)	10
図 4	1区グリッド配置図	8	表 4	2 区 1 号住居跡出土遺物観察表(石器)	11
図 5	2 区グリッド配置図・断面図	9	表 5	2区2号住居跡出土遺物観察表(土器)(1)	16
図 6	2区1号住居跡平・断面図	10	表 6	2区2号住居跡出土遺物観察表(土器)(2)	17
⊠ 7	2区1号住居跡出土遺物	11	表7	2区2号住居跡出土遺物観察表(石器)	17
図8	2区2号住居跡平・断面図	12	表8	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表(土器) (1) …	18
図 9	2区2号住居跡出土遺物(1)	13	表 9	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表(土器) (2)…	21
図10	2区2号住居跡出土遺物(2)	14	表10	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表(石器) (1) …	22
図11	2区2号住居跡出土遺物(3)	15	表11	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表(石器)(2)…	23
図12	2区17グリッド遺物集中部平面図	17	表12	10トレンチ炉跡出土遺物観察表(土器)	29
図13	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物(1)	19	表13	1 区出土遺物観察表(土器)(1)	30
図 14	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物(2)	20	表14	試掘時出土土器観察表	36
図15	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物(3)	21	表15	1 区出土遺物観察表(土器)(2)	36
⊠16	2 区17グリッド遺物集中部出土遺物(4)	22	表16	2 区出土遺物観察表(土器)(1)	36
図17	3 区グリッド配置図・断面図	23	表17	2 区出土遺物観察表 (土器) (2)	37
図18	4 区グリッド配置図・断面図	24	表18	3 区出土遺物観察表(土器)(1)	37
図19	5 トレンチ集石部平・断面図	25	表19	3 区出土遺物観察表(土器)(2)	38
図20	5 トレンチ集石部出土遺物	25	表20	4 区出土遺物観察表(土器)(1)	38
図21	8 トレンチ集石部平・断面図	26	表21	4 区出土遺物観察表 (土器) (2)	39
⊠22	9 トレンチ集石部平・断面図	27	表22	1 区出土遺物観察表(石器)	45
図23	9 トレンチ集石部出土遺物	27	表23	2 区出土遺物観察表(石器)	45
⊠24	10トレンチ炉跡平・断面図	28	表24	3 区出土遺物観察表(石器)	46
図25	10トレンチ炉跡出土遺物	29	表25	4 区出土遺物観察表(石器)	46
図26	1区出土土器	31	表26	凹石・磨石観察表	48
⊠27	2 区出土土器	32			
② 28	3 区出土土器	33			
⊠29	4 区出土土器 (1)	34			
⊠30	4 区出土土器 (2)	35			
⊠31	試掘時出土土器	36			
⊠32	1 区出土石器	40			
⊠33	2 区出土石器	41			
⊠34	3 区出土石器	42			
図35	4 区出土石器 (1)				
図36	4 区出土石器 (2)	44			
⊠37	土塩下原遺跡出土の凹石・磨石	48			

第1章 発掘調査に至る経緯

平成3年2月、株式会社ヤナセアンドアソシエイツより開発に係る計画協議書が松井田町に提出された。町教育委員会では、該地が縄文時代を中心とした遺物散布が認められ、遺跡地とされる旨を町地域開発対策委員会へ回答した。このことを受けて5月13日、ヤナセから町教育委員会宛てに埋蔵文化財確認調査(試掘)についての依頼書が提出され、試掘調査を行なうことになった。用地への立入りについては、隣接する耕地に影響を及ぼさないために、ヤナセと教育委員会で現地の立会いのもとに境界部分の確認、重機搬路の確認等(6月1日)を行なった後、6月17日から同29日まで試掘調査を実施した。その結果、区域のほぼ全域にわたって縄文期の遺物が認められ、部分的に遺構が検出されたため、遺跡の発見ならびに文化財保護の見地から設計変更についての協議を行ないたいとヤナセへ通知した。協議では、区域全域が遺跡地であることから双方共に苦慮するところであったが、最終的には会社側の文化財に対する理解が得られ、建物部分の調査と一部設計変更による埋め戻し保存の措置をとることになった。

調査に先立ち、株式会社ヤナセアンドアソシエイツと、教育委員会内に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会との間に8月10日付で発掘調査契約書が締結され、関係法令の手続きを経て9月18日から現地発掘調査を開始することとなった。

第2章 調査の方法と経過

Ⅰ 発掘調査の方法

開発区域における調査区の設定については、試掘結果に基づき、遺物分布の希薄な箇所ならびに 切土が遺物検出面に影響を及ぼさない部分を除外し、建物部分と遺構検出部分を対象に1~4区を 設定した。また、埋め戻しとなる6、8~10トレンチの遺構の記録もあわせて行なった。

計画では建物の軸が一定であるため、これに合わせて区域内に存在する三角点を0とする基線を設け、10m ごとに1、2・・・とポイントを落とした。そしてこれより北南両側(実際は北東、南西にあたるが便宜上北と南とした)へ直交する軸を設け、必要な箇所に10m 間隔のポイントを設定して平面位置の基準とした。例えば基線上のポイント1から北30m は1-30N、3から南へ20m では3-20S である(図3参照)。

掘削は、遺構及び遺物に注意を払いつつ重機によって行ない、試掘で判明した包含層直上より人力による確認作業に入った。先に設定したポイントをもとに各区を2m方眼で覆い、平板で遺物及び遺構の図化ならびに写真撮影を行ないつつ、最終的には試掘時の炉跡検出面まで $2\sim3$ 回に分けて精査を進めていった。図面縮尺は遺物分布を1:40、遺構部を1:20ないし1:10とした。また、写真はモノクロとカラースライドともに35mmフィルムを使用した。

Ⅱ 発掘調査の経過

調査は、掘削範囲(調査区)の設定から始め、次いで重機によりテント設置部の地ならし、表土除去と進めた。9月18日に現地の状況を確認して大まかなレイアウトを検討、草の刈払いとともに24日に基準杭と調査区のマーキングを終了する。25日より3区から表土除去を始め、2区、1区、4区の順に10月3日まで重機を使用した。作業員は9月27日を初日としてテントの設置、注意事項を確認してから3区より平面精査を開始した。以下、日誌を抜粋して経過を概観する。

- 9月27日 3区平面精査開始。トレンチ部分のポイント設定及び8トレの精査、写真撮影。
- 9月30日 2区、1区と3区2回目の精査開始。2区と3区に2mグリッド設定。8トレ立石部の図化と撮影を終了する。文化財調査委員、佐藤義一氏来跡。
- 10月2日 3区精査。近隣の方数人が見学に訪れる。
- 10月3日 重機作業終了。3区遺構なしで精査済。1区のポイント杭打ちと9トレ遺構部分の精査及び図化。
- 10月4日 本日より作業員5人追加し12人となる。4区ポイント杭打ちとレベリング。
- 10月14日 3区にサブトレを入れて土層の確認と図化。1区と2区の精査を続行する。9トレ図化及び撮影終了。文化財調査委員、上原富次氏来跡。
- 10月15日 2 区精査。3 区サブトレ図化終了。西横野保育園長の松本茂氏、同新井さん来跡。
- 10月16日 10トレ炉部分の精査と撮影。住居とされるプランは確認できない。
- 10月28日 2 区精査及び遺物図化。山武考古学研究所の千田幸生氏、福山俊彰氏来跡し、調査した遺跡との類似性から遺構調査の留意点等を伺う。
- 10月29日 2区精査。遺構が確認されないため、炉のレベルまで面を下げることにする。
- 11月6日 2区1号住居跡精査、図化。17グリッド遺物集中部、2号住居跡炉付近精査。
- 11月11日 2区精査終了。2号住居跡炉石には1号同様多孔石/石皿を含み、赤彩浅鉢を伴う1区の精査開始。
- 11月13日 1区精査終了し4区精査を開始する。両区とも他に比べて遺物の分布は疎らである。
- 11月15日 4 区精査。町企画課の鳥越係長、文化財調査委員の関光保氏来跡。
- 11月18日 4区精査終了、図化及びレベリング。掘削作業が終了したので道具類の清掃と片付けを行ない、テントを 撤収する。上原富次氏来跡。
- 11月19日 撮影、図化作業終了。トイレ清掃・撤収後、最終的な現場確認をして現場作業完了。

Ⅲ 整理作業の経過

表1 整理作業工程表

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
遺物	洗接実ト版写記元測ス成影1										-	-	
遺構	写真版下作成原図点検ス版を表して作成を表して作成は	-											
原稿	写真版下作成 遺物 観察表本 文										-	Lete - Te	- Til (=
3	- の 他											校止	・刊行

第3章 遺跡の環境

T 地理的環境

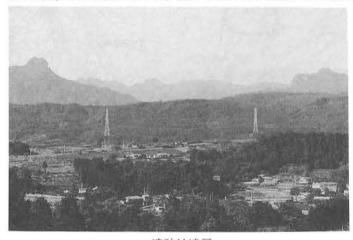
本遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字土塩字下原に所在する。北西約3kmにその頂をとる高戸谷山より南東方向へ延びる細野丘陵は、山麓の長久保地内から緩やかな傾斜をもって土塩、新井、下増田へと続いており、俗に細野原と呼ばれる。丘陵北麓には、倉渕村との境をなす地蔵峠西方に端を発す増田川が支流を集めながら流下する。また、南麓では高戸谷山南山腹より九十九川が流下し下増田東方の国衙地内で北方からの増田川と合流して、安中市に至り碓氷川に流れ込んでいる。これらの河床と遺跡地との比高差は、増田川で約70m、九十九川とは約100mを測り、台地上部からは比較的急峻に落ち込んでいる。遺跡地付近での台地の幅は南北約300mの平坦面をもち、東へ下るにつれて河床との比高差を無くしつつ幅を狭めてゆく。

この台地はローム層上に肥沃な黒色土が厚く堆積している。故に、古くより桑園や陸稲、野菜などの畑地として利用され、昭和28年より始まった増田川からの用水路工事によって、その後は水田での水稲栽培も盛んに行なわれている。しかし、近年、台地の中央を縦断する町道が開通したことにより、農業後継者の不足とあいまって該地の開発は年々増加の傾向を示している。

遺跡は台地の中央やや南に立地し、三方は山に囲まれながらも遠景が眺望される。南は九十九川を挟んで松井田丘陵から妙義山、西は高戸谷山から続く連峰及び浅間山が、北は増田川越しに長者 久保から地蔵峠、また、東は当台地東端から安中市が望め、視界が広くとれる環境と言える。

Ⅱ 歴史的環境

本遺跡が立地する「細野原」地域は、従来から遺跡の存在する所として町内ではよく知られている。さきに述べた昭和28年からの用水路工事に伴って、縄文期の遺構、遺物が広汎にわたって検出されたが、正式な調査がなされないまま現在に至っている。この間、耕作や小規模の開発行為による露出遺物は縄文期を中心に弥生時代以降まで多く確認されながらも、明確な出土地点を知り得るものは数少ない状況にあった。図1ではこれらを示すとともに河川を隔てる近隣地域の遺物、遺構



遺跡地遠景

の分布を提示した。いずれにせ よ、地理的条件に恵まれた当台地 が少なくとも縄文期から生活の舞 台として利用されてきたこと、そ して開発の促進等によって詳細が 明らかになってゆくのもそう遠く はないことであろう。

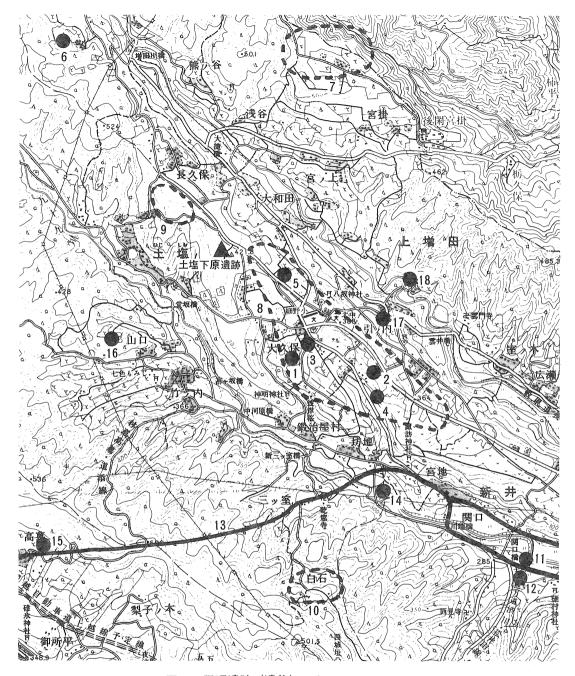


図1 周辺遺跡(遺物)分布図(1:25,000)

表 2 周辺遺跡の概要

No.	遺 跡 地(名)	時 代	概
1	土塩東大久保	縄文	昭和35年、畑の開田の際に前期関山式土器が出土。(細野小学校所蔵)
2	新 井 上 原	縄文	昭和32年、中期勝坂式土器が出土している。
3	土塩東大久保	縄文	昭和33年、中期加曽利E式土器のほぼ完形品が出土。(細野小学校所蔵)
4	土塩畑中	縄文	昭和49年道路拡幅の際に後期堀之内式土器の完形品が出土(町教育委員会所蔵)
5	上增田上細野原	縄文	昭和31年、後期加曾利B式土器が出土。(細野小学校所蔵)
6	上増田板ケ沢	縄文	昭和11年、後期加曾利B式期の小型コップ状土器が出土。(細野小学校所蔵)
7	上増田宮掛~浅谷	縄文	中期を中心とした土器、石器が濃密に分布している。
8	土 塩 地 内	縄文	昭和28年から40年にかけて細野地区の用水路工事が行なわれ、これに伴い縄文時代中期を中心に多くの遺物及び遺構が出土している。住居跡床面の一部、炉、敷石部等の他、5の北西では土坑が10数基検出され、該地周辺での遺構の広がりが推察される。
9	土塩長久保	縄文	中期を中心に遺物が多く確認されている。
10	土塩白石	縄文	中期を中心とした遺物の分布が認められ、石鏃が多く見られる。
11	細野 8号墳	縄文	石室部は陥没しているが全体に残存状況は良好。前方後円墳と思われる。
12	細野7号墳	古墳	別称狩塚。上毛古墳総覧によると帆立貝式古墳とあるが、現状では不明。昭和53年の 県道工事の際に葺石の一部と須惠器、土師器片が出土している。
13	東 山 道	古代~	古代の官道として整備された東山道は該地では図示したとおりである。新井地内で分岐しているのは、北方が当初のコース、南方はここより東の高梨子地区が松井田城のの城下町とされた頃(長享元、1487年以降)の迂回コースと考えられる。
14	土 塩 坊 地	鎌倉	建治 4 (1278) 年の銘をもつ板碑。残長171cmと大型で頂上線、天蓋、瓔珞、種子 (キリーク、サ、サク) 及び蓮座等とともに、下部には無量寿経念仏往生願の一節が刻まれる。
15	五料高墓	中世末	板碑。磨耗が進み年号は不明ながら、小型でかなり形骸化しており、中世末期の所産 と考えられる。この地に居住した者の供養塔と思われる他は定かではない。
16	土塩山口	中世末	小型の板碑で記年銘等は全く不明。15と同様、中世末のものと考えられる。
17	上増田引ノ内	中世末	同上。筒中に所在する。
18	上増田引ノ内	中世末	同上。八郡に所在する。

(参考文献) 「松井田町誌」 松井田町誌編纂室 1985

「松井田町の文化財」 松井田町教育委員会 1986

「歴史の道調査報告書~東山道~」 群馬県教育委員会 1983

他に、上原富次氏(松井田町文化財調査委員)、藤原 百氏(細野原土地改良区事務局)より多大なご教示をいただいた。

Ⅲ 基本層序

本遺跡地の標高は西端で $425\,\mathrm{m}$ 、東端で $420\,\mathrm{m}$ と比高 $5\,\mathrm{m}$ を測り、この範囲をほぼ 3 等分して段状の平坦面で畑の耕作が行なわれていた。それ以前は緩傾斜の地であったようであり、切土および盛土(主に切土)による耕地の開墾の状況が土層断面より看取された。示標テフラである浅間 A軽石(As-A, 1783年降下とされる)、浅間 B軽石(As-B, 1108年降下とされる)、また浅間 C軽石(As-C, 4世紀前半降下とされる)と思われる軽石が確認されているが、純層が残存する Aと Bをみてみると、概ね区域西方(北西)では共に削平されるか Bのみが少々残っている。中程の 4 区では A、B 共に確認でき、A 層上位には盛土としての A 二次堆積層及び A 混黒色土が耕作土とされている。また、東方(南東)は $1\,\mathrm{m}$ 程の落差の切土のためか A は耕作土中に混在するのみで B 純層も $10\,\mathrm{cm}$ 少々である。

一方、これより下位の堆積状況はほぼ一定しており、層厚の違いや色調の微妙な差異が認められる程度である。図 2 に示した V 層中の白色軽石粒は C 軽石と思われるが、同層では遺物が全く存在していない。また V 層及び V 層にみられる黄褐色軽石粒においては、浅間 D 軽石(As-D,縄文時代中期降下とされる)の可能性が考えられるが同定鑑識は行なっていない。本遺跡の遺物の 9 割以上を占める縄文中期の資料はこの V 層から V 層上位にかけて包含されている。遺構と認識した住居跡や集石も同層中に存在するが、地山と覆土の差異が殆どないためにプランの確認には至らなかった。以下、図に沿って各層を概観する。

I層 耕作土層 遺跡全般にわたっている。A軽石を含む黒色土でしまりは全くなく、断面で は常に崩落しやすい。

II層 白色軽石層 自然堆積A軽石純層。径20~30mmのものが主で 下位の粒子は密。4区と5トレンチで確認。

Ⅲ層 黒色土層 B軽石を含み、ほぼ全域に認められる。

№層 灰褐色軽石層 自然堆積 B 軽石純層。層厚は10~20cm程度で断続的に認められる所も多い。

V層 黒色土層 白色軽石 (C?) と黄色軽石を含む。比較的しまりがあり、ほぼ全域に認められる。

▼I層 暗褐色土層 黄褐色軽石微粒を含む、よくしまった粘質層。本層中位から▼I層上位が遺物包含層で全域にわたっている。

▼ 基本的に ▼ 層と同じだが色調が僅かに明るめで ▼ 層との境界はローム漸移層である。

▼層 黄灰色土層 本層以下がローム層となる。部分的に黄色軽石 及び集結部があり、板鼻黄色軽石(As - YP,

1.3万年前降下とされる)と考えられる。 原さ10~20cmで斜位に関われ、 ま常に頂い

IX層 黄色岩板層 厚さ10~20cmで斜位に凹凸し、非常に硬い。

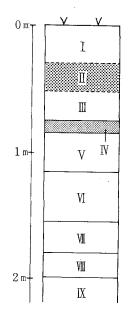


図 2 基本層序模式図

第4章 検出された遺構と遺物

I 概要

本遺跡で検出された遺構及び遺物はその全てが縄文時代に属するものであり、一部を除いては概ね中期後半に位置付けられる。本書においては、住居跡としたものが2軒、集石としたものが3箇所、炉跡1箇所で、他に円形の遺物集中部が1箇所認められた。集石では伴出遺物から5トレンチと9トレンチが後期、8トレンチ(立石)は遺物を全く伴わないため不明。また、住居跡及び遺物集中部、10トレンチの炉跡については中期の遺物を伴っており該期とされる。

各区ごとの状況をみると、1区では遺構を検出されておらず遺物も僅かに散在するのみであるがここでは完形の磨製石斧、打製石斧、多孔石などが注目される。2区は住居跡2軒、遺物集中部が検出され本遺跡の主たる調査区と言え、石皿と多孔石の機能を有する石材を炉石に転用(?)する状況やそれに伴う赤彩浅鉢、遺物量の多さなどが挙げられる。3区の遺物分布は1区よりやや多く一部に小礫と土器片が少々まとまる箇所が検出された。4区では面積に比して遺物は少なく、調査区端部で大型深鉢が単独で出土している。

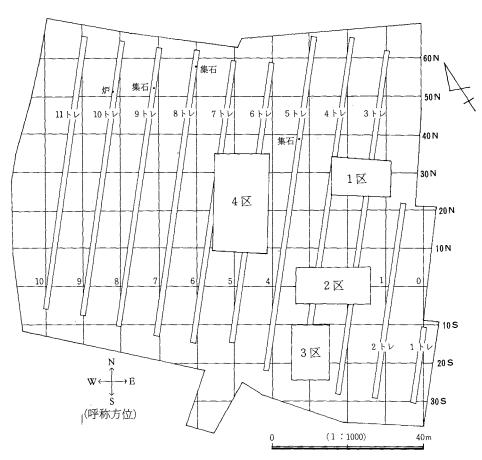
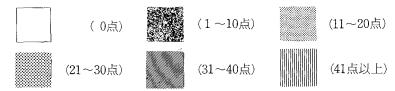


図 3 調査区域配置図

全体としては、遺物包含層中に占める遺構の割合が小といった感があり、また、集石部のまとまりがみられる遺跡北側と住居跡のみられる南(南東)側が対照的であるとも言える。

以下は、グリッド別の出土遺物点数を示す凡例である。便宜的に0、 $1\sim10$ 、……と10点ごとに示してあり、この中には土器(片)、石器(片)剝片の他に集中して検出された小礫(2 区 2 号住居跡ほか)などが含まれている。



Ⅱ 各調査区の様相

1 1区

1-30N及び2-30N付近に位置しており、面積約160㎡の調査区は $1\sim60$ グリッドに分割される。本区では遺構とされるものは全く検出されておらず、遺物の分布のみが認められた。

分布状況を見てみると、総数 215点のうち1グリッドが24点、22グリッドが27点、23グリッドが 22点と多く、近接する12、14、21グリッドがそれに次いでいる。3トレンチの東側では殆ど分布が 認められない。

遺物の内容は、土器片が 198点と大多数で一部を除いて中期後半に位置付けられる。殆どは小片または細片で、 2 グリッド出土の深鉢 1 点のみが底部から胴部下位にかけて全周する資料である。また、石器、剝片などは17点出土した。このうち、多孔石 1 点(12 グリッド)、打製石斧 3 点(1 、6 、22 グリッド)、磨製石斧 2 点(32 グリッド)、ミニチュア磨製石斧 1 点(23 グリッド)、石鏃

1点(20グリッド)の他は全て小剝 片であった。

本区と同程度の面積である3区と 比較すると遺物点数では大差は認め られないものの、その偏り具合及び 遺物総数における種別の割合などに 相違を見ることが出来る。

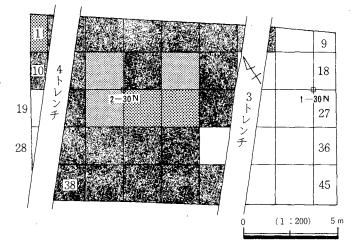


図4 1区グリッド配置図

2 2区

2-0及び3-0ポイントを中心にしている。面積は約200㎡で $1\sim60$ グリッドに分割される。 本区では試掘の際に3トレンチと4トレンチで炉跡が検出されており、付近には遺物が多く認められため、住居跡の存在とともにその分布状況の確認を念頭において精査が進められた。

本区は遺物点数において1024点と卓越しており、土器片 864点と石器等(小礫、剝片等を含む) 160点に大別される。これらは特に2号住居跡と17G遺物集中部付近に密に分布し、また12(29点)、13(23点)、21(24点)、31(39点)、41(24点)グリッドなど区域西側に多い傾向が認められた。 土器は殆どが中期後半に属し、沈線を地文とするものが主体を占めているようである。石器類では 打製石斧を主とする他、ミニチュア磨製石斧、多孔石/石皿、磨石などが該期の土器と伴出している。

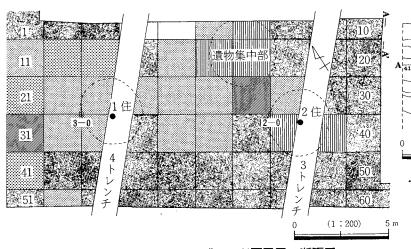


図5 2区グリッド配置図・断面図

- (1:100) 2 m
- 2 Bを多く含むしまりのない黒色土。 3 黄・白色軽石粒を全体に含む黒色土。
- 4 黄褐色軽石微粒を僅かに含む暗褐色土。よくしまる。

1 耕作土。AとBを多く含むしまりのない暗褐色土。

- 5 全体に黄色軽石を含む暗褐色土。
- 6 歯灰色ローム層。黄色軽石集結部あり。
- 7 軽石を含まないローム。

5

8 非常に硬い岩板状黄色ローム。

〈 1 号住居跡〉

位 置 23G、24G、33G、34Gにかけて存在する。

形 状 トレンチにかかる部分と33Gコーナーポイント脇で地山に散在する岩板状ロームブロックが斜位に途切れる部分があり、不明確ながらこれを壁とする楕円形と考える。

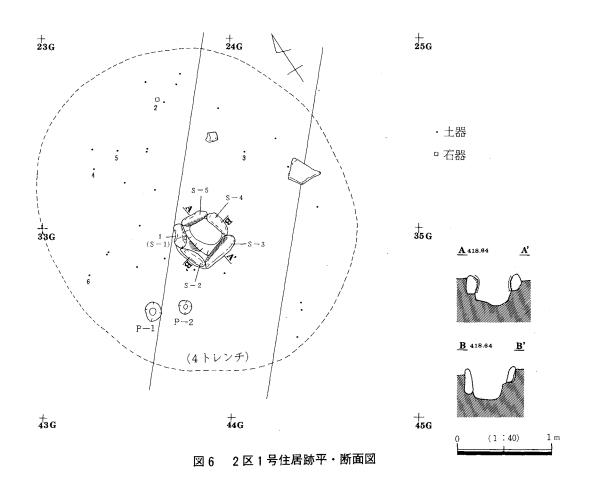
規模 推定で 3.6m × 3.2m。

炉 河原石状の自然石4個と石皿/多孔石の計5個からなる不整五角形で内部径約30cm、深さは炉石上部から約60cmを計る。炉石はS-1が石皿/多孔石(多孔石側を使用)S-2は非常に軟かい砂質茶褐色石、他は硬質のものである。被火の状況を見るとS-3、5及び西側炉壁(地山ローム面)が赤変し、S-4と5には剝離が認められた。覆土は暗褐色土中に僅かに炭化物が混在するのみで焼土の検出はない。

- 床 面 暗褐色土とロームが不安定に混在し硬さも一定でない。炉と遺物のレベルによる推定面 である。
- 土 坑 P-1とP-2で深さは 6.8cm、5 cm。住居に伴うものかは不明。
- 遺物 推定床面直上及び上面15cmより出土。土器は中期後半の加曽利 B 式に比定される。

表3 2区1号住居跡出土遺物観察表〈土器〉

No.	器種・部位	法 量	文様・調整	色 調	焼成	備考	出土
3	口縁部		太い隆帯による楕円文で縄文はLR。内面 ミガキ。	暗灰褐色	良	大型深鉢片	
4	胴 部		隆帯区画で無文部と縄文LR。	灰褐色	良		
5	胴 部		縄文RLに沈線の曲線文。内面ミガキ。	橙褐色	良	外面に少々炭化物 付着	
6	胴 部		縦位の細かな条線を地文とする。	,	良		



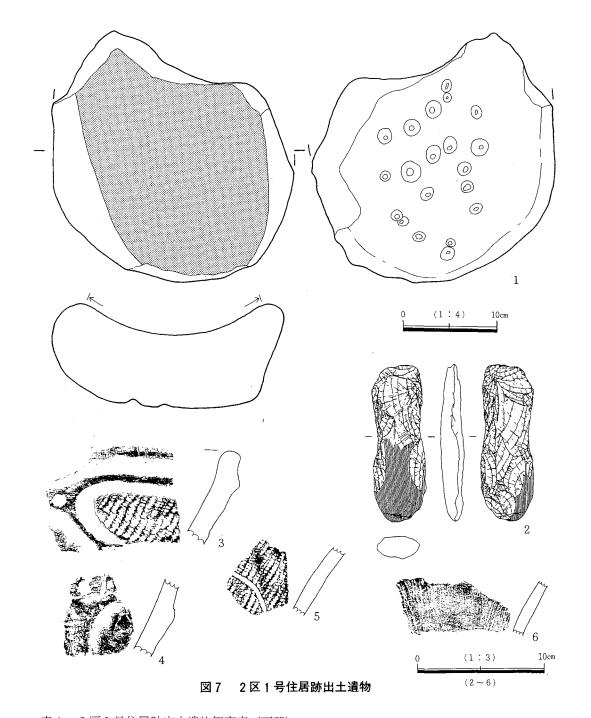


表 4 2 区 1 号住居跡出土遺物観察表(石器)

No.	器	種	形態	全長	幅	厚さ	重量	石	質	残	存	備	考	出土
1	石	m	算形?	(25. 2)	(25.5)	7.5	(7860)	両輝石9	安山岩	1/2	欠	逆円錘形断而の孔を もある。	もつ多孔石で	
2	打製	石斧	短冊形	12.5	4.2	1.8	115	輝石安	山岩	完	形	刃部は磨製		

単位はcm・g・() は残存値

【 2 号住居跡〉

位 置 38G、39Gを中心とする。

形状 円形と思われるが定かではない。

規 模 遺物の分布はトレンチ削失部分を除いて概ね 2.5mの円形を示しており、これと炉の位置を考慮して径約 3.4mの円形プランを想定した。

炉 大小計11個の石材を使用する。このうち方形の炉壁を形成するのは5個で、東西の外側にはその他の石が「押さえ」状に配されたりコーナーの隙間に詰められる状況が見られた。石質はS-1、2、3、4、7、8 が非常に軟らかい砂質の茶褐色石、他は硬質でS-10は石皿/多孔石の転用品である。板状節理の石は使用していないがS-1とS-7以外は全て扁平な形状のものを選んでいる。規模は炉内上部で径約40cm、下部の底面付近で20cmを計り、炉石上部から底面(検出されなかったため推定面である)までの深さは平均27cmである。被火による赤変はS-11の内面全体に認められるほかは明確でない。覆土は他部と同じしまりのよい暗褐色土で下位には部分的に焼土を含む。

床 面 覆土及び地山は共にしまりのよい暗褐色土であり判別できないために明確は床面は検出 出来なかった。同様に壁も不明。

土 坑 検出されない。

遺物 炉西側と、トレンチを隔てた東側に集中する傾向が見られ、トレンチ部分は試掘時に掘

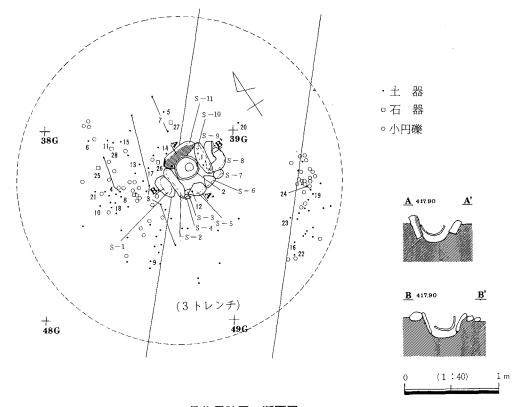


図8 2区2号住居跡平・断面図

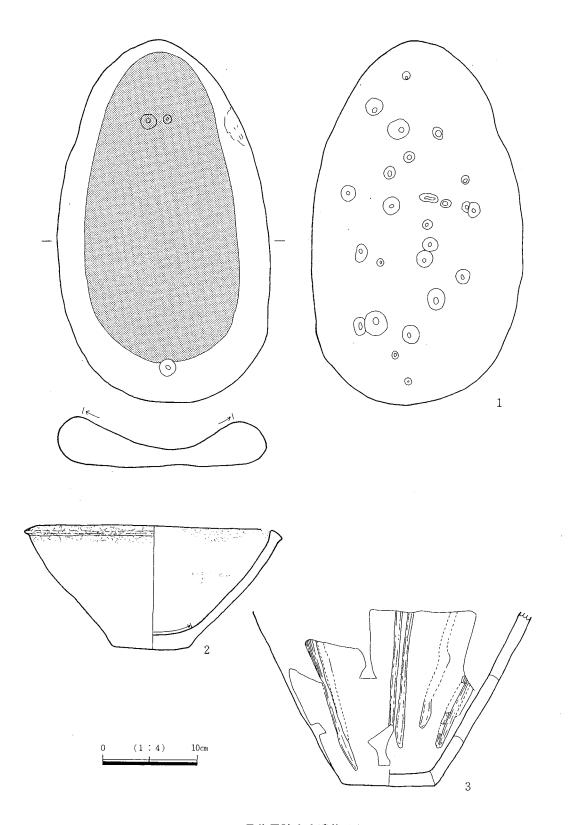


図9 2区2号住居跡出土遺物(1)

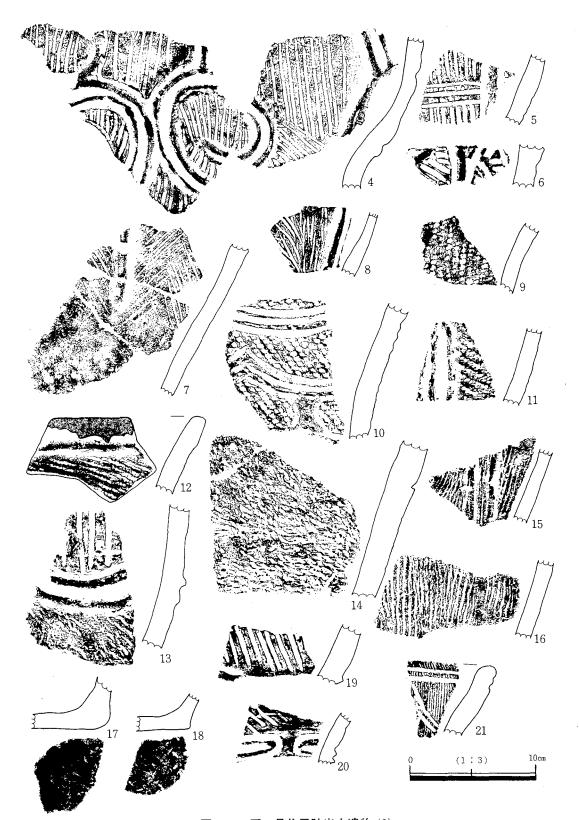


図10 2区2号住居跡出土遺物(2)

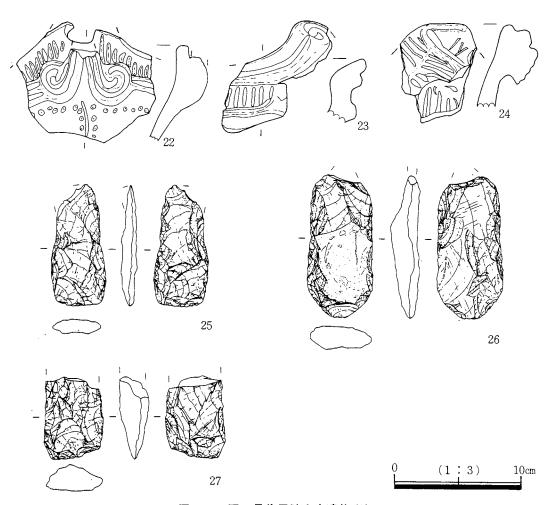


図11 2区2号住居跡出土遺物(3)

りあげてしまったものが多いと思われる。出土レベルは概ね炉石上部10cmで一定しており、これらを大別すると土器84点、石器4点、小円礫50点で計 138点を数える。またこの他に炉内出土の完形浅鉢(図9-2)、炉石に使用される石皿/多孔石(同-1)、剝片数片がある。土器は殆どが中期後半加曽利E式期に属すが図11-23、24あたりは後期かもしれない。石器は短冊形の打製石斧である。ここで小円礫としたものは概ね径 $4\sim8$ cmの自然石であり欠損するものも多く、無欠損4に対し欠損6の割合を示す。割れ口は非条に鋭く、また、欠損石中煤(?)による黒斑及び赤変の認められるものが認められないものの2倍、無欠損石では前者は後者の1/3を示しており被火による変色、欠損と言えるが人為的であるかどうかは定かではない。

表 5 2 区 2 号住居跡出土遺物観察表〈土器〉(1)

No.	器種·	部位	法	量	文 様 調 整	色	-	調	焼成	備	考	出土
2	浅	鉢	口底高	24.8 8.4 13.0	無文。口唇部は外斜面取りで内側に突出する。 内外面ともていねいな横ミガキで滑らか。口 縁部内外面には赤彩あり。	暗,	灰 褐	色	良	底部内外面ためザラコ		
3	深	鉢	底	10.0	幅広の微隆起の中央をなでて2条とされた縦 位区画に無文部と撚糸文を付す。	黄	褐	色	不良	非常にもそ	, (,)	
4	胴	部			2条の隆帯による渦巻文内外に縦位の太い沈 線を充塡する。内面雑な横ミガキ。	暗	灰 褐	色	良	4~6は同]一個体	
5	胴	部			縦位隆帯と縦横沈線。	暗	灭 褐	色	良			
6	胴	部			非常に起伏の強い隆帯と沈線。	暗	灭 褐	色	良			
7	胴	部			縦位微隆起の内外に稜杉状沈線を描く。	橙	裼	色	不良	内面に炭化	:物付着	
8	胴	部			雑な貼付の縦位隆帯と縦〜斜位条線。	灰	裼	色	良			
9	胴	部			縄文RLR。	橙	裼	色	*			
10	胴	部			地文LRL上に竹管状工具で3条の連弧文を 描く。内面は雑な横ミガキ。	灰	裼	色	良			
11	胴	部			雑な貼付の縦位並行隆帯で地文は縄文LR。 内面ていねいなミガキ。	灰	裼	色	良			
12	口糸	录 部			口唇部外面肥厚。地文は縄文LRか。	橙	裼	色	良	口唇部外面 付着	に炭化物	
13	胴	部			2条の隆帯の円文?で区画内は太い沈線、外部(地文)は粗い撚糸文。	橙	裼	色	良	14と同一個	体	
14	胴	部			粗い撚糸文が横〜斜位に施される。	橙	裼	色	良	大型深鉢片	-	
15	胴	部			縦位の細い撚糸文上に並行する縦位隆帯を付す。内面は縦横位のミガキ。		灰褐 黒褐		良	内面に炭化	2物付着	
16	胴	部			縦位の撚糸文。内面縦ミガキ。	1 .	暗褐 橙褐		良			
17	底	部			深鉢底部片。	橙	裼	色	不良			
18	底	部			深鉢底部片。	橙	褐	色	良			
19	胴	部			2条の隆帯による楕円文 (?) 内に太い沈線 を描く。	灰	褐	色	良	口唇部文档	様帯か	
20	胴	部			太い沈線による意匠で起伏が強調される。	暗	裼	色	良	口唇部文核	帯か	
21	口糸	录 部			地文は細かな縦位条線。連弧文か。	暗	灰褐	色	良			
22	口糸	录 部			起伏の強い隆帯と沈線による渦巻状の意匠で 下部は刺突列。内面横ミガキ。	暗	灰 褐	色	良	把手部欠拢	nmy	
23		录 部			大きく突出する把手部は上面に渦巻が描かれ る。	暗,	灰褐	色	良			

単位はcm

表 6 2 区 2 号住居跡出土遺物観察表 〈土器〉(2)

Nα	器種・部位	法 量	文	様		調	整	色	í	調	焼成	備	考	出土
24	口縁部		太い沈線で飾らる。	られた肥	温厚な	な把手	部片と思われ	黄	裼	色	良			

表7 2区2号住居跡出土遺物観察表〈石器〉

No.	器 種	形態	全 長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
1	石 皿	楕円形	38.3	22.2	1.8	6800	点紋緑泥片岩	完 形	裏面は多孔石で表而にも孔×3	
25	打製石斧	短冊形	(9.5)	4.2	1.2	(58)	緑泥片岩	基部欠	直刃・両刃	
26	打製石斧	短冊形	(11.2)	5.2	2.1	136	輝石安山岩	基部欠	丸刃・両刃、片而に原石而を残す	
27	打製石斧	短冊形	(6. 6)	4. 6	(2. 3)	(86)	硬 砂 岩	基部欠	直刃・両刃	

単位はcm・g、() は残存値

〈17グリッド遺物集中部〉

2区17Gを中心とする 遺物の濃密な分布を示す 部分である。規模は概ね 2.5m×3.0mで全体を 包括し得る円形のライン で大体の範囲を示した。 遺物出土層は本区の第4 層下位で約30cmの範囲に ある。点数は土器 327点、 石器12点(便宜上、ライン内のものをカウント) で本区での遺物総数1024 点の実に33%を占めている。

遺物の時期については 土器の殆どが縄文中期後 半の加曽利E式期で、無 文や細片等不明なものも

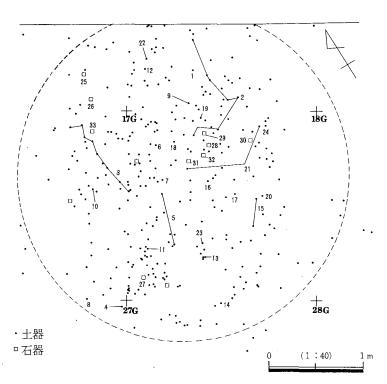


図12 2区17グリッド遺物集中部平面図

同時期と思われる。また、石器は打製石斧11点と丸石1点だが、丸石については打製石斧以外の石(製)遺物(剝片や2号住居跡に伴っていた小礫など)がここでは殆ど検出されないため、明確な使用痕は認められないながらも石器として提示した。

表8 2区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表〈土器〉(1)

No.	器種	· #	3位,"	法 量	文 様・調 整	ŧ	色 声	周	焼成	備考	出土
1	深		鉢	□ (52, 2)	中央が深く門む太い隆帯で渦巻と把手を交互 に付し、他は太い沈線を充塡。内面雑な横ミ ガキ。	暗	灰褐	色	良	口縁外面に薄く炭化 物付着	7 G
2	深		鉢	□ (42.4)	口縁部は隆帯による不整楕円文及び渦巻文で 3条と2条の沈線が垂下。縄文RLを地文と する。	橙	褐	色	良	胴部下位内面に薄く 炭化物付着	7 G 17G
3	深		鉢	□ (24.5)	太い隆帯で区画された口縁部は楕円文と渦巻 文が交互に配され、胴部は2条の隆帯と1条 の蛇行降帯が交互に垂下。地文は細い縦位条 線。	.外			良		16G 17G
4	手。	ず く	ね	底 3.5	細い沈線で曲線を描く	暗	灰褐	色	良	欠損上部は輪積痕	26G
5	浅		鉢	口(23.4) 底(10.8) 高(13.2)	縄文浅鉢で内外面は雑な横ミガキ。	灰	裼	色	良	部分的に黒斑あり 底部外面摩耗	17G
6	深		鉢		地文の縦位沈線上に2条と1条の隆帯が交互 に乗下し、間に3~4本1組の横位沈線を巡 す。	暗	灰褐	色	良	胴部下位内面に薄く 炭化物付着	17G
7	胴		部		中央の凹む太い隆帯の渦巻内に縦位沈線。 内而横ミガキ。	暗	灰褐	色	良		27G
8	胴		部	-	同上の降帯による意匠。	暗	灰褐	色	良	7と同一個体	16G
9	胴		部		同上の隆帯で上と横はS字状文で連結される。	暗	灰褐	色	良	外面に炭化物付着	7 G
10		縁	部		沈線による意匠。内面横ミガキ。	外内	暗灰 黄 複		良		7 G
11	胴		部		隆帯の渦巻文の周りに刺突を巡す。	暗	褐	色	良		17G
12	胴		部		半截竹管による雑な並行沈線。	橙	裼	色	良	黒斑あり	7 G
13		縁	部		中央の凹む隆帯による口縁部楕円文。	灰	褐	色	良		17G
14		縁	部		同上の渦巻部。	灰	褐	色	良	13と同一個体	27G
15	胴		部		全て沈線による意匠で内外面とも滑らか。	暗	灰褐	色 [·]	極良		17G
16		縁	部		内折する口縁部で外面は粗い斜位沈線。	橙	褐	色	良	上位内外面に炭化物 付着	17G
17	胴		部		細い隆帯貼付と刺突による起伏のある横位蛇 行文。	暗	褐	色	良		17G
18		縁	部		同上の細かな縦位蛇行文及び沈線。	暗	褐	色	良	外面に炭化物付着	17G
19	П	縁	部		横ころがしRLで充塡された楕円文。	黒	裼	色	良	外面に炭化物付着	17G
20		縁	部		太く粗い隆帯区画だが上位はつながっている。 口唇部は横位で他は縦位撚糸文。一部に沈線 蛇行懸乗文あり。	外内			良	外面上半に炭化物 付着	17G

単位はcm、() は推定値

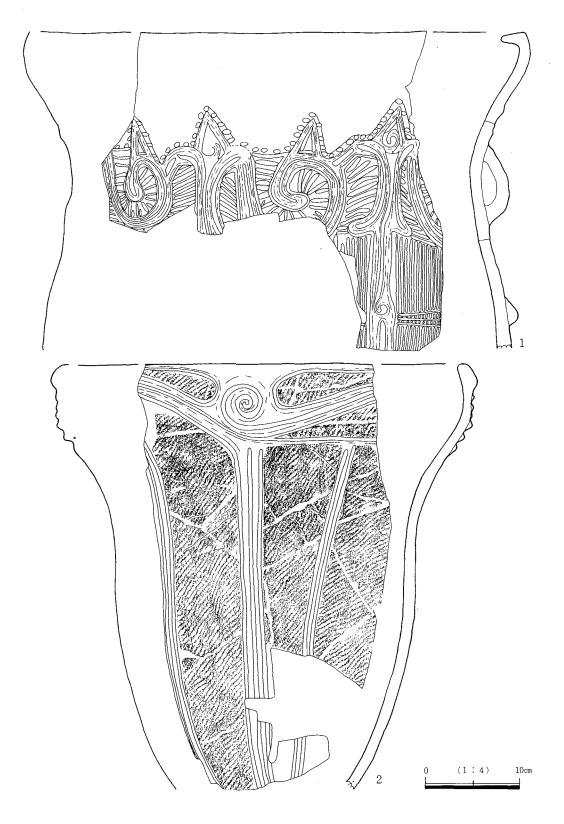


図13 2区17グリッド遺物集中部出土遺物(1)

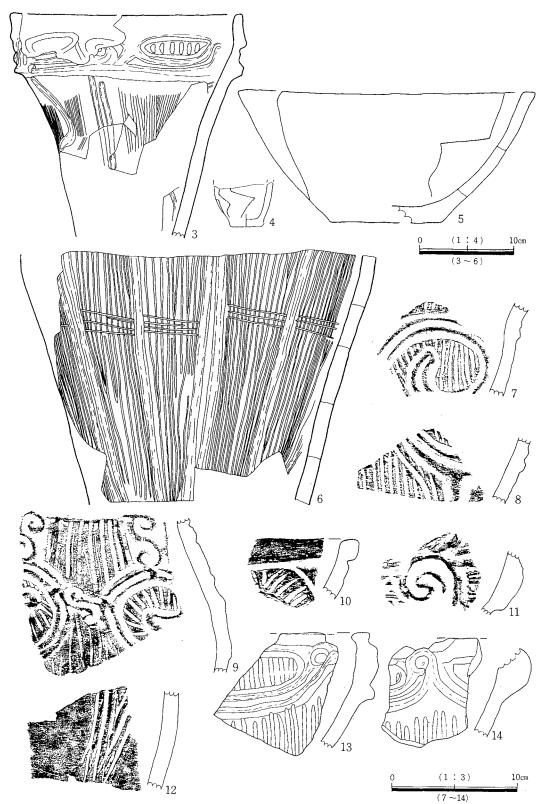


図14 2区17グリッド遺物集中部出土遺物(2)

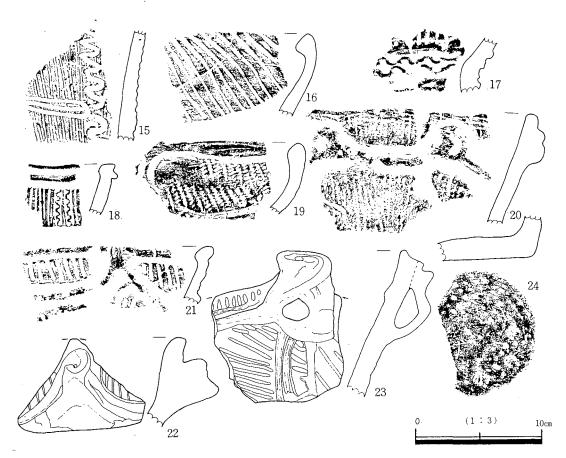


図15 2区17グリッド遺物集中部出土遺物(3)

表9 2区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表〈土器〉(2)

No.	器種・部位	法 量	文 様・調整		色	į	周	焼成	備考	出土
21	口縁部		縦位沈線をもつ口縁部楕円文。	ļ	黒	褐	色	良	内外面に炭化物付着	17G
22	口縁部		把手状に大きく突出する楕円文中間部。	1	橙	褐	色	良		17G
23	口縁部		同上で完全な把手と言える。	1	登	褐	色	良		17G
24	底 部		胴最下部に縄文RLと並行隆帯が残る。	1	登	褐	色	良	底部僅かに網代痕	17G

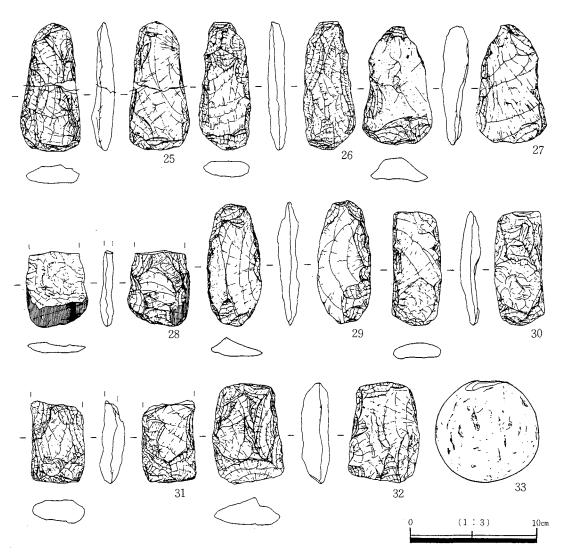


図16 2区17グリッド遺物集中部出土遺物(4)

表10 2区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表〈石器〉(1)

No.	器種	形 態	全 長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
25	打製石斧	短冊形	10.3	4.7	1.7	80	輝石安山岩	完 形	直刃・両刃	6 G
26	打製石斧	短冊形	10.2	4.0	1.3	80	緑泥片岩	完 形	両刃・縦長剝片を使用	6 G
27	打製石斧	撥形	9.4	5.4	1.8	104	輝石安山岩	完 形	片刃・片面に原石面を残す	17G
28	打製石斧	短冊形	(5.9)	4.8	(1.0)	(36)	砂質頁岩	基部欠	両刃・一部磨製	17G
29	打製石斧	短冊形	9.9	4.2	1.4	75	砂質頁岩	定形	片刃・片面に原石面を残す	17G
30	打製石斧	短冊形	9.0	3.7	1.5	58	砂質頁岩	定形	片刃?	17G
31	打製石斧	短冊形	(6.3)	(4.2)	(1.8)	(67)	砂質頁岩	基部欠	片刃	17G

単位はcm・g、() は残存値

表11 2 区17グリッド遺物集中部出土遺物観察表 〈石器〉(2)

No.	88	種	形	態	金	長	朝	厚	ş	重	景	石	Ħ	残存	付款	考	出土
32	打製	石斧	短用	邢	7	. 9	5.4	2	. 2	13	10	砂質	頁岩	完 形	片刃		17G
33	丸	石	球	形	8	. 0				45	50	砂	岩	一部欠	正球に近い。明	確な使用痕不明	16G

単位はcm・q

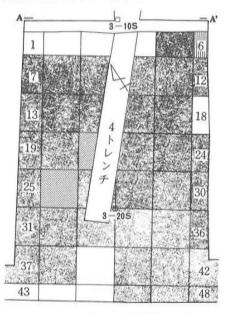
3 3区

 $3-10 \, \mathrm{S} \, \mathrm{AUS} \, 3-20 \, \mathrm{S} \, \mathrm{d}$ 近に位置する。面積は約 $150 \, \mathrm{m}^2 \, \mathrm{c} \, 1 \sim \! 48 \, \mathrm{J}$ リッドに分割された。本区では遺構は検出されておらず、遺物が認められるのみであった。

遺物総数は 237点で内訳は土器片が 176点、石器等(小礫、剝片を含む)が61点である。これらは 4 トレンチ西側を主として概ね全域全体に分布するが、6 グリッドでのみ70点と集中する箇所が見られた。ここでは縄文中期の土器片を主体とする中で径 4 ~ 5 cmの小礫が20点と多く、また、出土層位である 5 層下位から 6 層中には炭化物の混在も認められた。このようなことから一定の拡がりをもつ遺構部とも考えられるが、東側が区域外のために確認には至らなかった。



3区6グリッド



· 3区

- 1 耕作土。AとBを多く含むしまりのない暗裾色土。
- 2 B純層。径1-10mmで灰褐色。
- 3 黄・白色軽石粒を全体に含む黒色土。
- 4 黄褐色軽石微粒を僅かに含む暗褐色土。 よくしまる。
- 5 全体に黄色軽石を含むやや粘性のある 黒色土。
- 6 黄色軽石及び集結部のある粘質黒色土。 硬い。
- 7 ローム漸移層。
- 8 非常に硬い岩板状黄色ローム。厚さ20 cm程度で斜位の凹凸をなす。

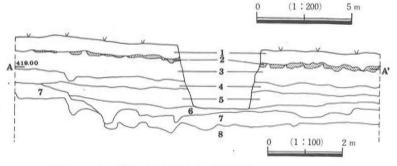


図17 3区グリッド配置図・断面図

4 4 🗵

 $5-10\mathrm{N}\sim5-30\mathrm{N}$ 付近に位置する。面積は約 $370\mathrm{m}^2$ と調査区の中では最も広く、グリッドは $1\sim112$ に分割された。遺構とされる部位は全く検出されず、小量の遺物が認められたのみである。

遺物点数は68点と面積に比して非常に希薄な在り方を示している。グリッドで見ても遺物 0 の部位は77箇所、その他でも $2\sim3$ 点のところが大半である。この中では、石器等(剝片類を含む)が28点で41%と多くを占めており、特に凹石は8点(うち1点は磨石の機能あり)で、これは他の調査区が3区の1点のみであることと比較すると非常に高い数値を示している。一方、土器は43グリッドで深鉢胴部中位が一周するものと、108グリッドより底部から口縁部が残る大型深鉢が出土(共に掘り込みは伴っていない)した以外は小片が大多数であった。

本区では示標テフラである浅間A軽石及び浅間B軽石の純層が残存する。A層の上位には寄せ集

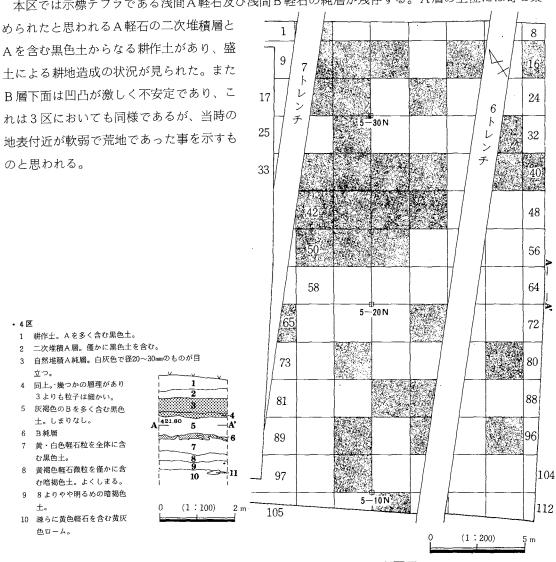


図18 4区グリッド配置図・断面図

5 5トレンチ

3-40Nのポイントより約3m 西方に位置する集石である。径40cm程の扁平な自然石が3個と間に小さな自然石が2個と、60cm程離れて円柱状の自然石1個が検出されている。付近には小石や土器片が散在し、集石とほぼ同レベルかやや低い位置にあった。周辺は少々黒ずんでいるがプランとされるものは確認できなかった。石の一つには上面の稜に剝離が認められたが、明確な赤化などは見られないため被火によるものかどうかは判然としない。

遺物は図20に示した土器片の他は無文の小片のみであり、時期を判断し得るものは 2 点であった。 1 は外傾しつつ立ち上がる深鉢片で太い沈線を横に巡らして下部は並行沈線で山形文らしき文様を描き、内部は雑に磨り消す。 2 も同様の意匠でやはり非常に雑な磨り消しである。 1 、 2 共に内外面は比較的良好な横ミガキが見られ、これらは後期堀之内 II 式と判断される。

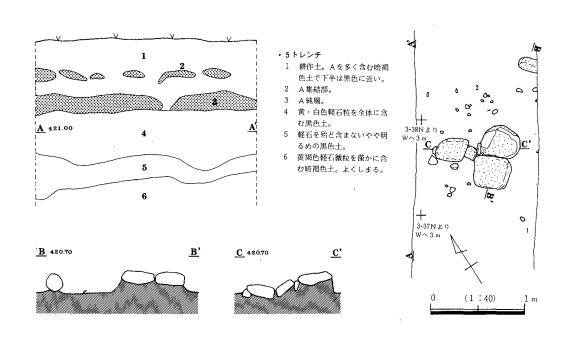


図19 5トレンチ集石部平・断面図

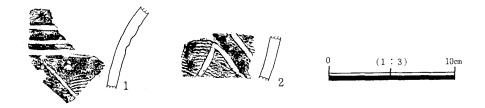


図20 5トレンチ集石部出土遺物

6 8トレンチ

6-60Nよりやや南において立石を伴う集石が検出された。石は計9個が確認されたが、これらのうち長径30~40cmの不整形な自然石6個は内部を囲う形で径80~90cmの円形に配される。また、その内側は同様の石2個が置かれ、中心部あたりには長さ70cmを計る不整角柱状の自然石が東に傾く形で立石をなし、下半部は土中に埋まる状態であった。

立石の上部と北側の石の一部には剝離が認められたが、赤変や擦痕などの人為的な部位は見られず全て自然石による集石で、掘り込みも伴ってはいない。また、付近には遺物が全く確認されないために時期の判断は出来ない。囲石についても、東側が区域外であるためにその全貌を確認するには至らなかった。

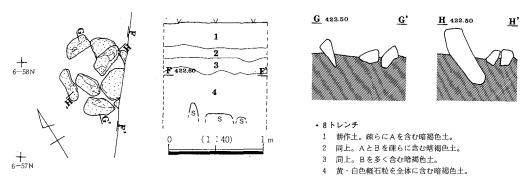


図21 8トレンチ集石部平・断面図

7 9トレンチ

7-50N~53N付近より検出された集石遺構である。本遺構部は3箇所の集石ポイントに分けることが出来るが(アは単独なので集石ではないが)便宜上包括して提示することとし、以下個別に概観してみる。

(ア) は角柱状の自然石が横倒し状態で検出され、石および周辺に人為的痕跡は認められなかった。(イ)は扁平な角柱状自然石をL字状に据えてある。石材には上面に剝離や赤変及び欠損が著しく認められ被火によるものと言えるが、周辺に焼土はなく、掘り込みも伴ってはいない。また、北側の石の上面は全体に浅く窪んでおり、南側についても平坦であることから、何かの「台」としての機能が示唆される。一方、北側の石に接して小円礫と板状節理石片が検出されたが、三角形の板状石片にはその中央に径3 cm、深さ2 cm程の摩滅した円形の凹みが認められた。(ウ)では板状石数片と不整円石による集石であるがこれといった規則性は見られない。たが、石がトレンチの壁に入り込んでいるので両側に続いている可能性は考えられよう。

遺物は主に(ウ)付近に多く見られたが全てが小片である。出土レベルは4層下位から5層にかけてであり集石のそれと一致する。図に示した $1\sim3$ は後期前半の堀之内式期にあたり、4は底部片転用の紡錘車である。(ウ)部の遺物については4以外は無文や細片が多いため図示していないが、概ね中期後半期のものと思われた。

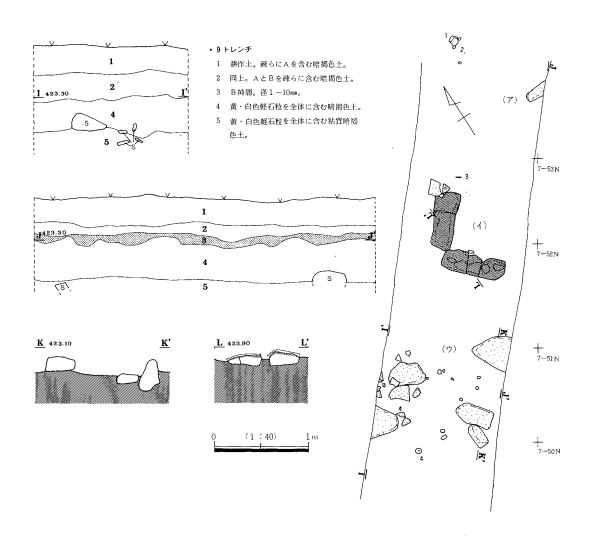


図22 9トレンチ集石部平・断面図

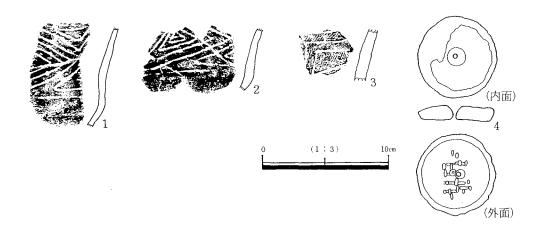


図23 9トレンチ集石部出土遺物

8 10トレンチ

8-51 Nより西方約 1.5 m において、方形の石囲炉とこれに伴う土器 3 個体が検出された。炉の規模は外部の長さが75~80 cm で炉石底付近の内部では40~45 cm を計る。使用石材はS-1 から S-3 が同じで非常に軟らかい砂質の茶褐色を呈すものであり、S-4 のみ灰白色で硬く異質である。また S-3 は長楕円形だが他は基本的には板状のものを使用している。炉石の上部をみると S-4 が他より10 cm 程上に出ており石質も異なっているのは他との差別化によると思われる。

炉の検出によりこれに伴う住居の存在が考えられたが、平面及び断面からもプランの確認は出来なかった。これは、2区の住居跡と同様に地山と覆土との差異が殆どないためと思われるが、屋外炉として単独で存在することも否定できない。また、炉内の覆土においても若干の炭化物を含む以外は炉外の土と同質なために明確な火床面を確認することは出来なかった。図24で示した断面のラインは炉石の下部より追った推定面である。

遺物はS-3とS-4のコーナーで縄文深鉢が3個検出された。レベル的には炉石直上と炉に伴うことは明確である。図25の1と3は胴部下位から底部が欠損する他は全周し、2は口縁部のみが欠損している。これらには全てにおいて胴部外面上半に炭化物の付着による黒変が認められ、1は口縁部内面にも1mm程の厚みで炭化物が残存する。時期は縄文時代中期後半の加曽利E式期前半に比定されよう。また、付近に数片検出された土器片は無文で浅鉢と思われるが同時期と考えられ、他に原石面をもつ黒曜石($5 \times 3 \times 2$ cm程)がS-1 南の壁際より出土している。

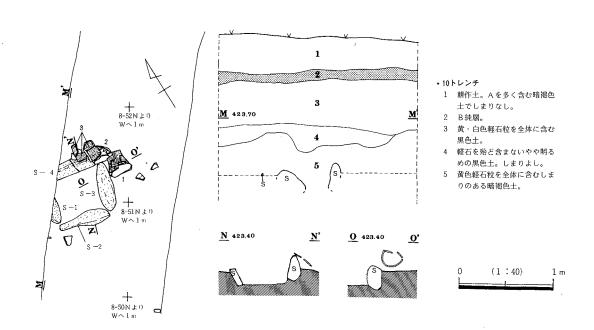


図24 10トレンチ炉跡・平・断面図

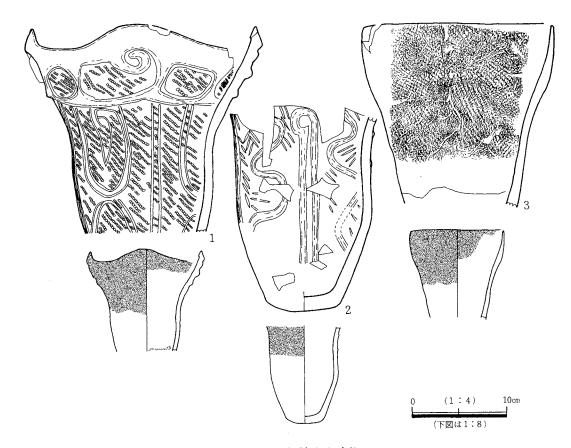


図25 10トレンチ炉跡出土遺物

表12 10トレンチ炉跡出土遺物観察表〈土器〉

No.	器種·	部位	法	量	文	様	· 調	整	色	調	焼成	備	考	出土
1	深	鉢		23.6		R で口縁 0 波状部 泉による	部は隆帯 分直下で		橙	褐 色	良	付着し、「	は炭化物が □縁部内外 ハ。内面底 もあり。	
2	深	鉢	底	7.6		逢帯が付	される。	が5単位垂下 地文は稜杉状	外内	橙褐色 暗褐色	不良	胴部上半6 物付着	こ薄く炭化	
3	深	金本		20.0	器面全体に縄 れる。内面上 で滑らか。	-			橙	褐 色	良	着し口縁部	炭化物が付 郊外面は著 面にも少々	

単位は cm

Ⅲ遺物

1 土器

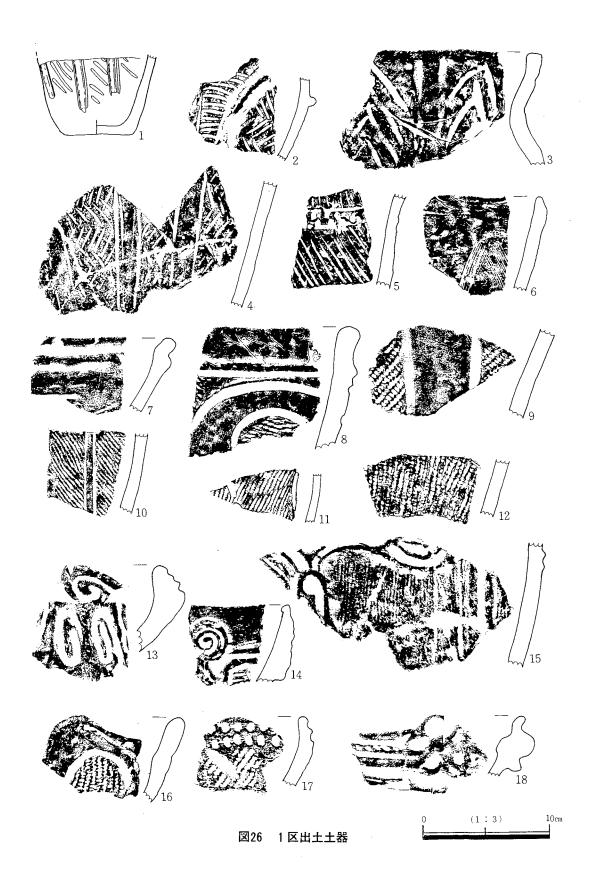
本遺跡は全域にわたって遺物包含層であるため、各区において多くの遺物、特に土器の検出が認められている。それぞれの点数及び遺構に伴うものについては前節に示したとおりであり、ここでは単独で出土した資料について調査区ごとに掲載したが、全てを網羅出来ないため次のことを一応の選定基準とした。

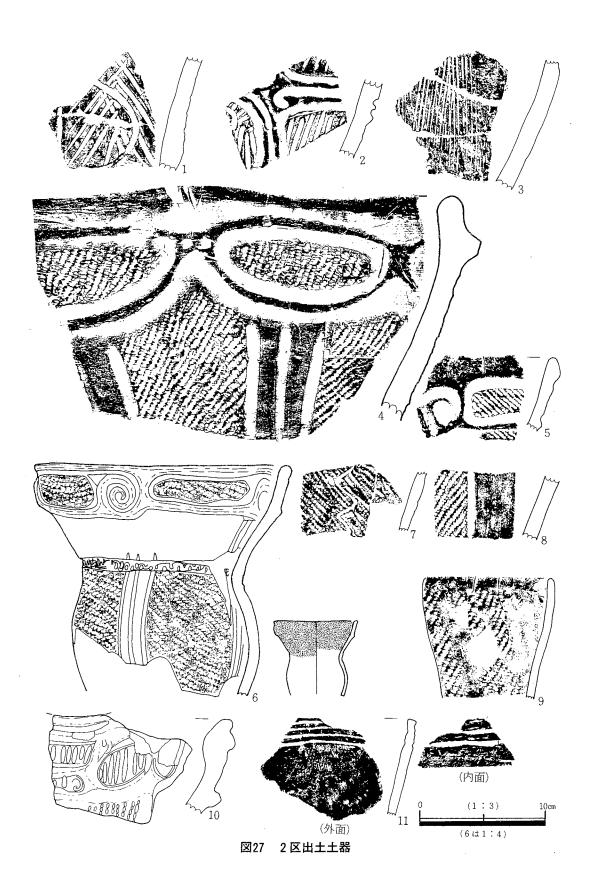
- 同一個体及び文様構成が同じ場合は、特徴的な部位や文様の残りが鮮明なものを選定。
- ・無文の場合は復元実測し得ないものは割愛した。
- 大半が中期後半の資料であるので、それ以外の後期に該当するものは掲載するよう努めた。

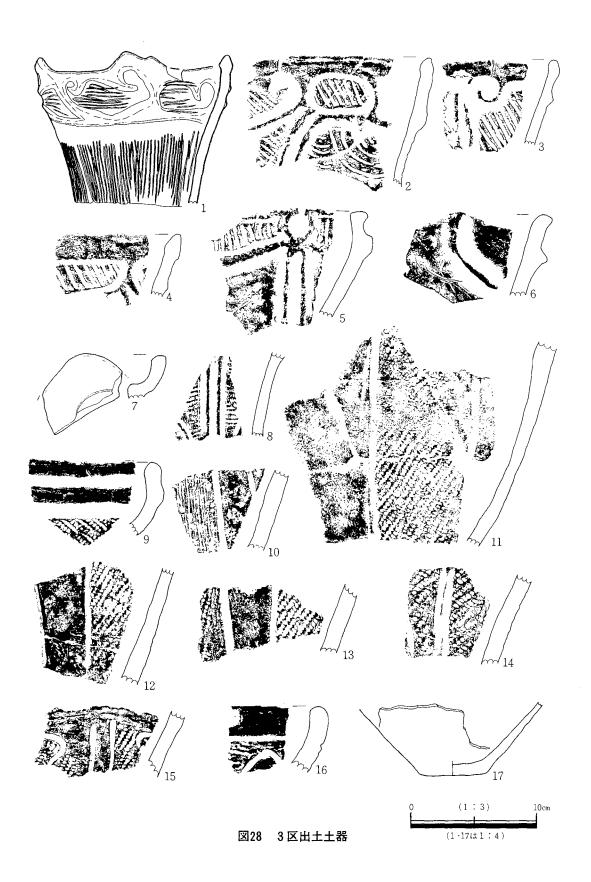
表13 1区出土遺物観察表〈土器〉(1)

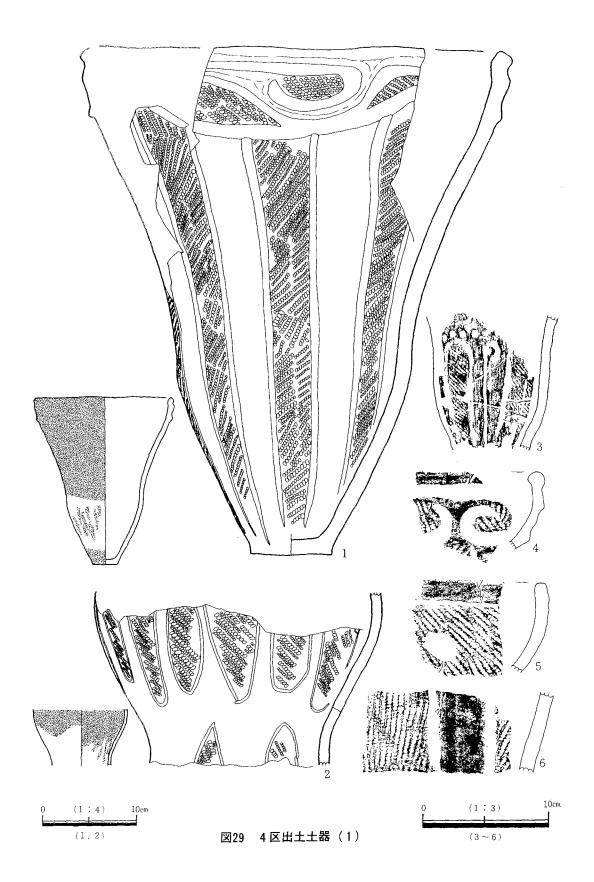
No.	器種・	部位	法	景	文 様・調 整	色	調	焼成	備考	出土
1	深	鉢	底	5.6	計7本の雑な隆帯が垂下し、間は斜位及びV字状の沈線を施す。		橙褐色 黒褐色	良	小型深鉢	2 G
2	胴	部			ていねいな貼付の高い隆帯区画で内部は横位 鋸歯文、外部は横位沈線を施す。	1	橙褐色 黒褐色	良		21 G
3	口縁	部			太く雑な沈線で縦区画と山形文を描く。厚手 である。	暗	褐色	良	外面の大半に炭化物 が付着	21 G
4	胴	部			縦位沈線区画で広い部分に横位鋸歯文、狭い 部分は無文部としている。	l '	橙褐色 暗褐色	良		12G
5	胴	部			干鳥状の刺突で横位の蛇行隆帯状の意匠をも ち、他は縦〜斜位沈線。	1 '	橙褐色 黒褐色	良	内面に炭化物付着	21 G
6	口縁	部			雑な横へラケズリの器面に櫛歯状工具で山形 文を施す。	灰	褐色	良		29G
7	口縁	部			口唇部垂下の沈線で隆帯状に突出する。内面 横位ミガキ。	灰	褐 色	良		14G
8	口縁	部			くっきりとした沈線による曲線文で内外に縄 文L、中間は無文部とする。内面はヘラナデ に近い幅広の横位ミガキ。		暗褐色 橙褐色	良	大型深鉢	不明
9	胴	部			竹管状工具による幅広の横位沈線で無文部と 縄文部(縦ころがしRL)からなる。	黄	褐 色	良		4 G
10	胴	部			縦位並行沈線内部は磨り消し、内部は地文の 縄文LR(縦ころがし)を残す。		灰褐色 暗褐色	良	内面に炭化物付着	2 G
11	胴	部			地文の縄文LR(横ころがし)に竹管状工具 で曲線文を描く。内面は滑らか。	灰	褐 色	良		29G
12	胴	部			縄文RLと思われる。		暗褐色 黄褐色	良		12G

単位はcm









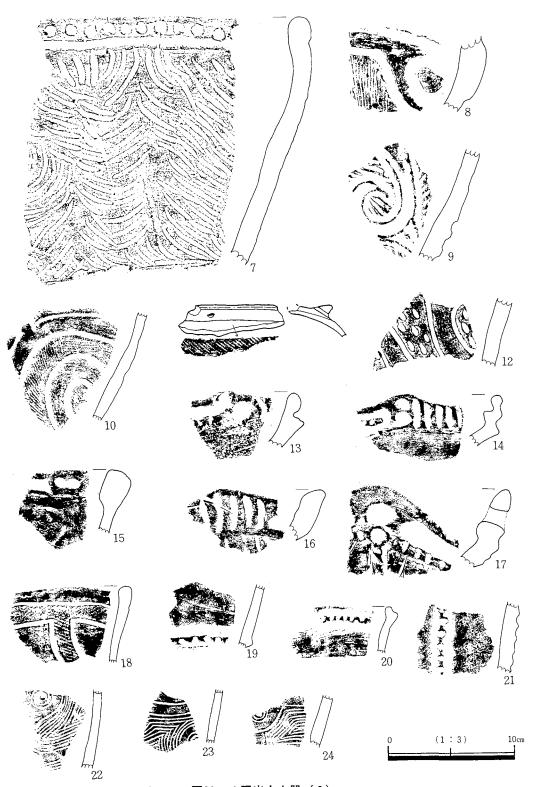


図30 4区出土土器 (2)

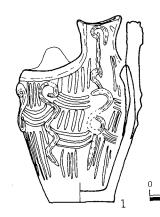


表14 試掘時出土土器観察表

No.	器 種	法 量	文 様・色 調・調 整など	出土
1	深鉢	口 10.7 底 7.0 高 19.5		4トレンチ南側

(1:4) 10cm

単位はcm

図31 試掘時出土土器

表15 1区出土遺物観察表〈土器〉(2)

Nα	器種・部位	法	量	文	様		調	整	色	調	焼成	備	考	出土
13	口縁部			波状に突出 ⁻ られる。	— する把手	— Fで沈	線による	渦巻文で飾	暗褐色		良			5 G
14	,,			隆帯による 器面は全体			唇部内側	は折り返す。	暗褐色		4	外面部分 が付着	的に炭化物	22G
15	"			隆帯による 撚糸文と思		,,	区画で地	文は細かな	橙褐色		"	外面上部	3に炭化物付	21 G
16	"			波状口縁部 ころがし。				縄文RL縦	黒褐色	ļ	"			7 G
17	"			口縁直下に	2列の刺	列突と	他は縄文	RL.	暗褐色		"			15G
18	,			波状口縁部 画内に小さ も一つ刺突	な刺突を						"			22G

表16 2区出土遺物観察表〈土器〉(1)

No.	器種・部位	法量	文 様 ・ 調 整	色 調	焼成	備考	出土
1	胴部		竹管状工具による太い沈線による意匠で蛇行 沈線が垂下する。	灰褐色	良		41G
2	,		2条の隆帯区画で内部は縦位沈線。	外 黒褐色 内 炭褐色	"		38G
3	"		縦位条線。内面横位ミガキで滑らか。	灰褐色	"		31G
4	深鉢		隆帯の楕円文部より竹管状工具による太い沈 線が3条垂下し、内部を磨り消す。地文は縄 文RL縦ころがし、内面は横位ミガキ。		"	口縁部外面に炭化物付着	31G

表17 2区出土遺物観察表〈土器〉(2)

Na	器種・部位	法	量	文様	•	調	整	色	調	焼成	備	考	出土
5	口縁部			隆帯の楕円文で れる。地文は縄			縁と思わ	灰褐	 	良	外面に少々 着	炭化物付	不明
6	深鉢		26.0	口縁部は渦巻をf びれ部には粘土 蛇行隆帯が巡る。 線3条が計5単f 部までつながる。 頸~口縁部内面(Hと千鳥状 胴部は渦 立垂下し、 縄文はL	対突によ 巻部のと うち3単 R L 縦こ	る細かな ころで沈 位は渦巻	外内	灰褐色暗褐色	"	類〜口縁部は薄く炭化		58G
7	胴部			縄文LR縦ころ	がしで蛇行	下沈線が垂	下。		橙褐色 黒褐色	"	胎土に金雲	母を含む	49G
8	4			縄文RL縦ころ	がしで縦位	江沈線間を	磨り消す。	灰裙	3色	. "			12G
9	深鉢	П	(9.6)	縄文RL縦ころだ デで口縁部は内欠			位ユビナ		暗褐色 黒褐色	"	口縁部外面付着	に炭化物	31 G
10	口縁部			厚い隆帯による 下部には撚糸文: が欠損している。 キ。	を付す。残	存部右上	には把手	7.	暗褐色 灰褐色	"	外面に少々着	炭化物付	60G
11	"			口縁部外面に 4 きもつ。内外面の		2条の並	行沈線を	灰褐	3色	不良			2 G

単位はcm、() は推定値

表18 3区出土遺物観察表〈土器〉(1)

No.	器種・部位	法 量	文	様	· 調	整	色	調	焼成	備	考	出土
1	深鉢	□ (20.0)	帯による口標 間の計8単位	縁部の区 位で渦巻 は縦位条	犬をなし、薄 画は波状部直 文をもつ。区 娘で口縁部と	下とその中	黄褐色	3	良	下部の割 痕	れ口は輪積	21G
2	□縁部				で胴部へ向か 立及び弧状の		暗褐色	3	*			6 G
3	"				条の隆帯が垂 いねいな横位	下し、地文 ミガキ。	橙褐色	2	"			6 G
4	4		隆帯による	—— 楕円文。[内面横位ミガ	` † 。	暗褐色	3	11	外面に炭	化物付着	6 G
5	"		隆帯区画で	2条が胴部	部へ垂下する	0	"		11		"	6 G
6	"				より高い隆帯 寺に内面は滑	が付される。 らか。	灰褐色	2	,			不明
7	"		波状口縁部	片。内面に	は親指大に凹	む。	"		"			21 G

単位はcm、() は推定値

表19 3区出土遺物観察表〈土器〉(2)

No.	器種・部位	法	量	文	様	•	調	整	色	Ē	調	焼成	備	考	出土
8	胴部			地文は縄文L 垂下。内面は					が 橙純	曷色		良			37G
9	口縁部			横位ユビナデ 縄文RL横こ か。					1	号 色		"			26G
10	胴部			縦位沈線で条	線部と	無文語	郷に区画	する。	4	,		不良	内外面部分	う的に剝離	38G
11	*			幅広の縦位沈				文RL縦こ		,		"	内外面部分物付着	分的に炭化	6 G
12	"			同			上			,		4	11と同一個	固体	12G
13	"			同			上		4	,		"	4		6 G
14	"			縄文RLR上	に2条	の縦(立沈線が	推下。		,		"	内面は剝離	推著しい	13G
15	"			2条・沈線と	蛇行沈	線が	垂下。縄	文はRL。	暗原	灭褐色	1	良			27G
16	口縁部			沈線内部は縄の外面及び内げる。					1 ~	曷色		4	外面に少々着	♥炭化物付 ・	17G
17	浅鉢	底 7.	. 0	無文。内面はか。	横位。	外面(は縦位ミ	がキで滑ら	赤衫	曷色		"			6 G

単位はcm

表20 4 区出土遺物観察表〈土器〉(1)

No.	器種・部位	法 量	文	様 ·	調	整	色	調	焼成	備	考	出土
1	深鉢	口(44.0) 底 8.8 高 53.5	口縁部は指ナーで渦巻文を作りで均等区画を 面は口縁部が がキ。	出。胴部に し磨消部に	は縄文RL」 を一つおき。	上に指ナデ	暗褐色		良	口縁部から と胴部最了 で薄く黒変には部分的 が付着	をし、下位	108G
2	"		地文LR上に 外部を磨り消	_	「n」の沈紅	泉を配し、	橙褐色		"	外面は部分 炭化物、ま 全周に炭化 落ちる	た内面は	43G
3	4		「fl」沈線とれ 部には縄文LI は刺突円文を記	R縦ころス			,		"	小型深鉢		91G
4	口縁部		隆帯と指ナデル	こよる渦れ	巻文、縄文(tRL。	黒褐色		"	内外面に炭	比物付着	27G
5	"		口唇部のみ無り	文で以下に	は縄文しR紅	従ころがし。	暗褐色		"			14G
6	胴部		地文は縄文RI	一斜めこれ	ろがし。		黄褐色		"		-	2 G
7	口縁~胴部		口縁は円形刺st 線を充塡。口線				暗褐色		"	外面に少々着	・炭化物付	41G

単位は cm、() は推定値

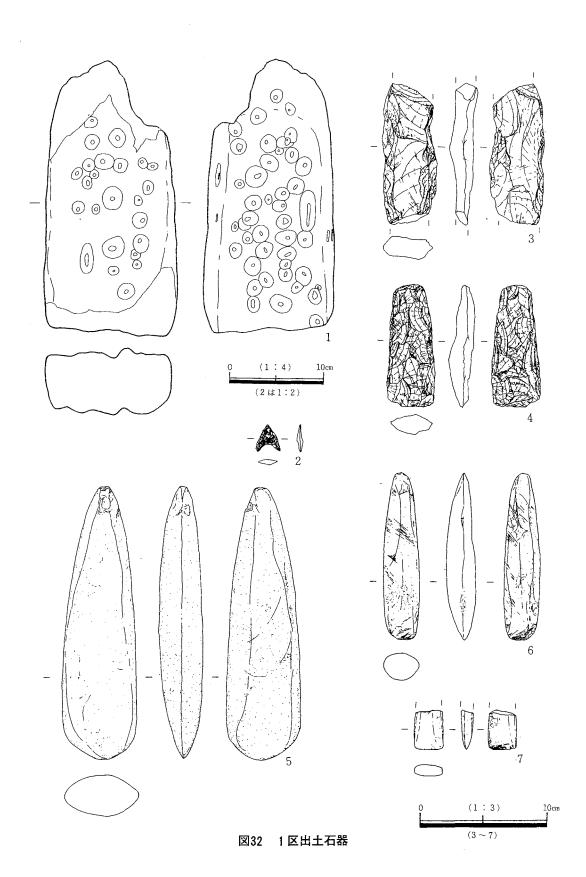
表21 4区出土遺物観察表〈土器〉(2)

No.	器種・部位	法 量	文	羨・調	整	色 調	焼成	備考	出土
8	口縁部		 隆帯渦巻文及ひ 	縦位条線。		暗褐色	良		42G
9	胴部		並行隆帯による	渦巻の意匠。		橙褐色	"		16G
10	"		沈線の円 (渦巻 ろがしと磨消部	き?) 文で細かな網 がらなる。	縄文RL横こ	暗褐色	"	磨消部は赤色塗彩	31 G
11	鍔部 (?)			文RL横ころがり 。内外面非常にど		"	*	内面と鍔の一部に赤 色塗彩	50G
12	胴部		沈線による曲線	で無文部と刺突部	部を描出。	"	,		87G
13	口縁部		僅かに突出する	口縁部内外面に	刺突を施す。	黄灰褐色	不良		103G
14	"		内折する波状口 の刺突あり。	縁部で外面は2、	内面に1つ	灰褐色	良		36G
15	"		波状口縁部上面	iに刺突2、内面/	こは1つあり。	"	*	外面に炭化物付着	110G
16	"		僅かに波状をな	す。		"	不良		2 G
17	"		大きく突出する 刻目のある太い	が 波状部は貫孔し、)隆帯。	直下は粗い	黄褐色	"		41G
18	*			Hかな縄文LRで何 列外面とも滑らか。		暗褐色	良	外面に炭化物付着	21 G
19	胴部		横位隆帯に粗い)刻目をもつ。内外	外面滑らか。	黒褐色	"	"	10G
20	口縁部		刻目のある隆帯	詩部より口縁が内打	折する。	橙褐色	"		47G
21	胴部		縦位隆帯に粗い	対目をもつ。		暗褐色	"	外面に炭化物付着	12G
22	"		1	限による曲線。円 の縄文LRを浅す。		. 1/	"	23、24と同一個体	10G
23	"		"		"	"	4		4
24	"		"		"	"	"		,,

2 石器

本遺跡より出土した石器は総数70点であるが、紙面の都合上この内の54点を図化した。また2区2号住居跡等に伴う小円礫や各区における剝片類はここでは含まない。石器自体の時期は不明なものも多いながら、遺構の伴出土器や同包含層の土器からその殆どが縄文時代中期と考えられる。54点の器種別は、打製石斧30点、凹石・磨石類12点、磨製石斧4点、石皿・多孔石4点、石鏃3点、原石(黒曜石塊)1点である。石質では輝石安山岩17点(全て打製石斧)、両輝石安山岩11点、砂岩8点あたりが多く、また定角式を含む磨製石斧は輝石、石鏃は黒曜石とチャートというふうに器種による使用石材の制約が通有の形で表れている。

さて、本項では前節に示した遺構に伴うもの以外の39点を提示してある。1区の多孔石は他区の



-40 -

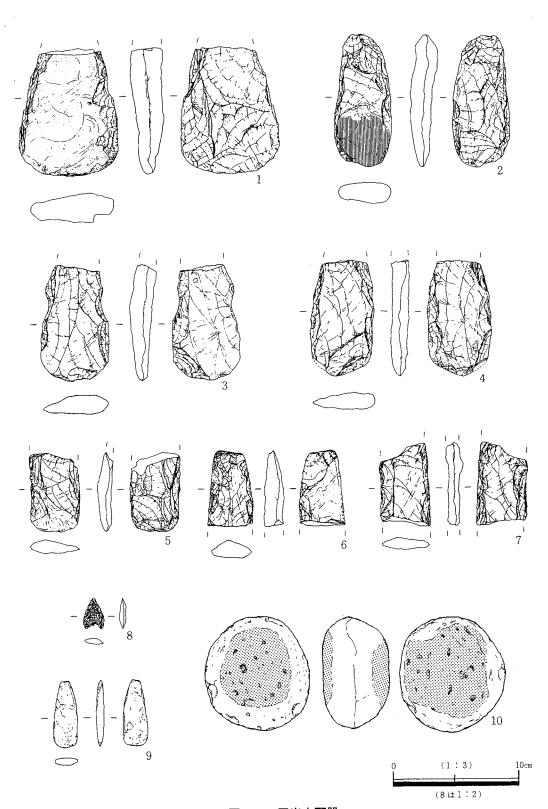


図33 2区出土石器

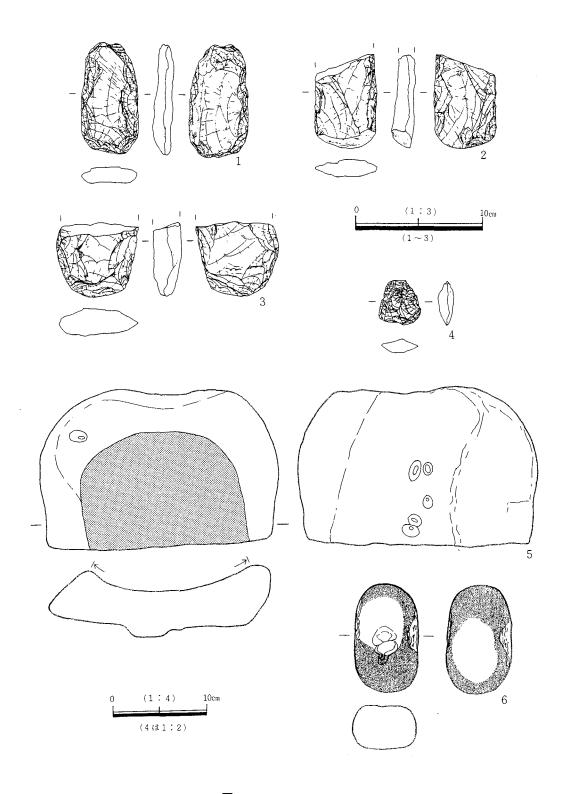


図34 3区出土石器

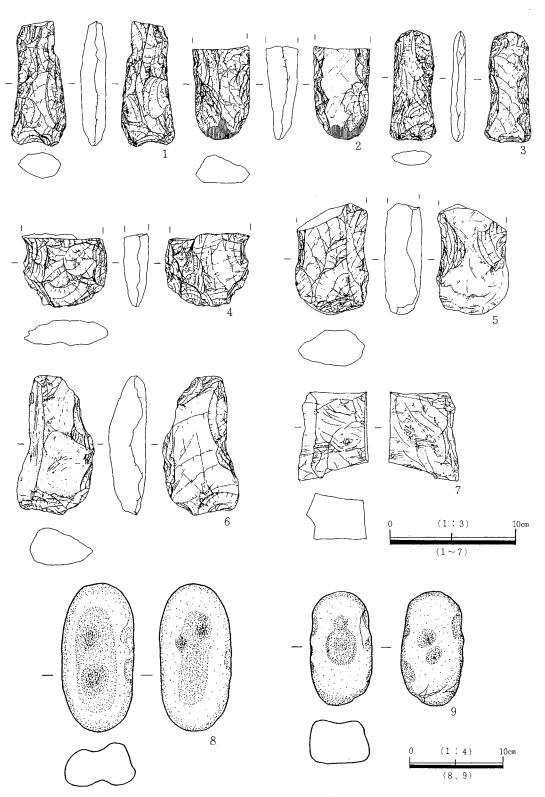


図35 4区出土石器(1)

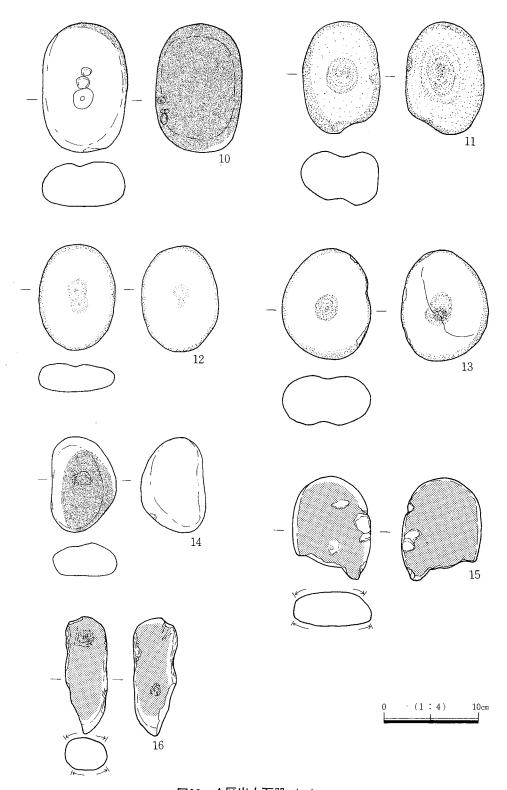


図36 4区出土石器 (2)

3点が石皿の機能を共有するのに対して孔部のみを有し形状も角柱状となっている。 2区で出土した磨石は、裏表面は非常に滑らかで側縁部が敲打痕らしき凹凸面となっているが、裏表面については自然(原石)面の可能性もあり、同区の住居跡に伴う石皿との関係についても安易には結び付けられない。 3区の凹石には煤による黒変が認められるが、付近には焼土や被火の痕跡がないことから黒変時の原位置は保たれていないと考えられる。 4区では凹石の多さが挙げられるとともに黒曜石が検出されており、これは 1区及び 2区で出土した石鏃等の用材として採取したものであろう。産地は長野県和田村にその可能性を求められるが、鑑識同定はしていない。

表22 1区出土遺物観察表〈石器〉

No	器 種	形態	全 長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
1	多孔石		(28.3)	13.1	6.8	(4170)	点紋緑泥片岩	両端欠	逆円錐形の孔を両面にもつ	12G
2	石鏃	無茎	1.1	1.2	0.3	1g未満	黒曜石	完形	凹基無茎鏃	20G
3	打製石斧	短冊形	(11.0)	4.2	1.9	(114)	輝石安山岩	両端欠		22G
4	"	4	9.6	3.8	1.7	90	砂質頁岩	完形	直刃・両刃、基部の一部に原石面	1 G
5	磨製石斧	乳棒状	21.3	5.9	3.3	640	輝石	"	丸刃・両刃	32G
6	,,	"	13.1	2. 9	2.3	120	"	"	,	"
7	"	定角式	(3.1)	(2.3)	(0.9)	(12)	. ,,	基部欠	直刃・両刃	23G

単位はcm・g、() は残存値

表23 2 区出土遺物観察表〈石器〉

Na	器種	形態	全長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
1	打製石斧	撥形	(10.0)	7.8	(2.5)	(235)	輝石安山岩	基部欠	片刃、片側に原石面を残す	32G
2	"	短冊形	10.4	4.5	1.8	114	"	完形	片刃、刃部の一部磨製	31 G
3	"	4	(9.1)	5.3	1.8	(110)	"	基部欠		不明
4	4	"	(9.0)	5.0	1.4	(90)	"	"	刃部の一部欠損	39G
5	"	"	(6.1)	3.9	1.1	(38)	黒色頁岩	刃部側	直刃・両刃	40G
6	"	"	(6.0)	3.6	1.6	(42)	砂質頁岩	刃部欠	片側に原石面残す	31G
7	"	"	(6.5)	4.0	1.2	(36)	砂岩	両端欠		35G
8	石鏃	無茎	1.4	1.1	0.3	1g未満	黒曜石	完形	凹基:無茎鏃	12G
9	磨製石斧	定角式	5.3	1.9	0.6	10	輝石	"	両刃	44G
10	磨石		9.3		5. 4	550	両輝石安山岩	"	両面磨耗、側面全体は敲打痕?	51 G

単位はcm・g、() は残存値

表24 3区出土遺物観察表〈石器〉

No.	器 種	形態	全 長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
1	打製石斧	短冊形	8.7	4.5	1.4	80	輝石安山岩	完形	片刃	8 G
2	"	"	(6.9)	4.9	1.7	(81)	"	基部欠		38G
3	"		(5.9)	6.3	2.3	(118)	"	. #	丸刃・両刃	26G
4	石鏃		(2.3)	2.2	0.8	(4)	チャート	先端欠	円基鏃と思われる	6 G
5	石皿	長方形	(16.5)	25.3	8.4	(4260)	両輝石安山岩	是 欠	雑な孔が数か所ある	48G
6	凹石	楕円形	11.3	6.8	4.5	540	,	完形	四部は剝離状で浅い 面の大半は煤で黒変している	21G

単位はcm・g 、() は残存値

表25 4区出土遺物観察表〈石器〉

No.	器種	形態	全 長	幅	厚さ	重量	石 質	残存	備考	出土
1	打製石斧	短冊形	9.9	4.2	2.0	. 101	砂岩	完形	 両刃、基部に原石面を残す 	39G
2	"	"	(7.0)	4.5	2.5	(100)	"	基部欠	刃部の一部は磨製	36G
3	"	"	8.6	3.7	1.2	. 54	,	完形	直刃・両刃、側面上部に原石面	52G
4	"		(5.7)	(6. 6)	2.0	(100)	"	基部欠	丸刃·両刃	99G
5	*	短冊形	(8.5)	5.8	3.0	(225)	両輝石安山岩	4	未製品か?	12G
6	"	撥形	10.7	5.8	3.0	201	輝石安山岩	完形	片側に礫面を残す	40G
7	原石		7.0	5.5	3.7	198	黒曜石		所々に軽石を含む	44G
8	凹石	楕円形	15.4	7.5	4.6	655	両輝石安山岩	完形	片方は凹×2、もう一方は溝状に 沈む	40G
9	"	*	11.8	6.5	4.5	600	*	"	側面にも不整な凹みあり	75G
10	"	"	13.6	8.9	4.7	780	"	"	片面のみ凹む、片側は煤で黒変	14G
11	"	"	11.7	8.2	5.2	685	"	"	非常に軟質、不整楕円形	43G
12	"	"	11.1	8.1	2.8	400	砂岩	"	両面磨耗、両側面に敲打痕あり	95G
13	"	*	11.6	9. 2	5.2	755	硬砂岩	"	両側面に敲打痕あり	37G
14	"		10.0	5.7	3. 7	375	両輝石安山岩	,	剝離状凹み×1、片面は煤で黒変	16G
15	磨石	楕円形	(11.0)	8.3	3.6	(480)	,	部欠	両面磨耗し非常に滑らか	52G
16	"		(12.3)	4.5	3.5	(285)	砂岩	"	両面磨耗、側面の大半に敲打痕	35G

単位はcm・g 、() は残存値

第5章 まとめ

本遺跡では、主に縄文時代中期の遺物及び遺構が全域にわたっていることが判明した。前にも触れたように、「細野原」と呼ばれる本丘陵上では従前より該期を中心に多くの遺物の出土が知られており、これらの一部は町内に保存されている。しかしながら、いずれも開墾や工事によって偶然に発見されたものであるために、出土地点や遺構との関係など不明瞭な点も多かった。今回は当地域における初の発掘調査であったが、これらの資料との関連及び遺跡地近隣の遺物分布を予察するうえでも意義のあることと思われる。

さて、本項では「凹石」と呼ばれる石器に注目し、若干の考察を行なうことでまとめにかえたい と思う。なお、紙面の都合上雑駁な稿であることをお断わりしたい。

〈土塩下原遺跡出土の凹石について〉

凹(くぼみ)石は礫石器の一形態で縄文時代中期に多く見られる。概要は図37及び表26を見ていただくとして、その用途については大別して「石器製作具」、「木の実割り具」、「発火具」の3説がありいずれも定説とはなっていない。ここではこれらと本遺跡出土の凹石のデータとを対比させることで諸説の検証の一端になればと考えている。

①石器製作具説

「槌」か「台」かである。実験では槌とした石には小さく浅い凹みの集合体(アバタ痕)ができ、台には「固定した凹み」ができるということである。本遺跡でのアバタ痕は、 $1\cdot 2$ (裏表と側面)、 $3\cdot 6\cdot 7\cdot 10\cdot 11$ (側面のみ) にみられるが、これによると幅の狭い側面を主に使用したのであるうか。台側の凹みについては詳細が不明なので触れないこととする。

②木の実割り具説

凹みの大きさがクルミなどに近い場合が多く、また手で持つにも頃合であることなどから本説に 妥当性を抱き易いのではないかと思われる。先ず台として考えた場合、安定性のよさ(石自体及び 木の実の)が大きな条件と言え、2、3、4、5、7はこれを満たしている。一方、槌の場合はある程度の平面があれば機能し得るであろうが、この際あえて狭い側面を使用するとは思えない。いずれにせよ、石質がよほど軟質でない限り石側が凹むとは考えにくいことから本説での凹みは「使用の結果」とは考えられない。ただし、使用頻度によって凹みの表面が摩滅するものであるのかどうかは不明である。

③発火具説

火きり杵の押さえとされる。この場合は杵がはずれてしまわないための目的でつくられた凹みであるので安定性が重要となる。このためには、石の形状が整っており凹みが中央にあること(例えば正円形、ただし一人が片手にして作業するとして)、凹みの形状が整っておりある程度の深さがあること等が必要となる。前者については正円形のものはないが凹みの位置は殆どが中央となっている。後者では先に述べたように使用により削られて凹みが整うとは思えず、また、もしそうであれば回転の痕跡が認められるはずであるが、本遺跡の遺物に該当するものはない。

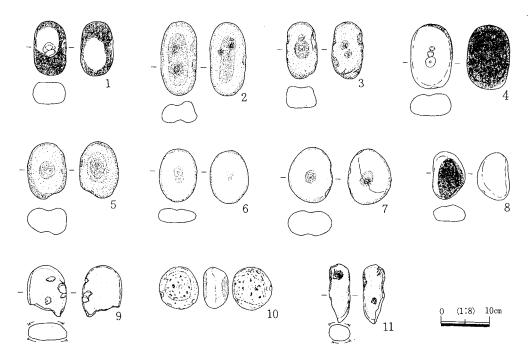


図37 土塩下原遺跡出土の凹石・磨石

表26 凹石・磨石観察表

Nα	形状	全長	幅	厚さ	重量	石 質	凹みの数	凹み位置	凹みの平面形	凹みの断面形	凹み摩滅	側面の状況	側面の摩滅	その他	出土
1	楕円形	11.3	6.8	4.5	540	両輝石安山岩	2	片面中央	不整楕円形	皿形(剝離状)	無	中央が全体に 凹む	無	裏表両面の縁辺が少々摩滅す る	3 ⊠21G
2	長楕円形	15.4	7.5	4.6	655	,	6	両面中央	長楕円形/円形	皿形/逆円錐形	4	計3個の凹み あり	4	裏表両面とも広い凹み中に小 さなものが存在する	4 ⊠40G
3	"	11.8	6.5	4.5	600	,	4	"	円形	*	少々有	裏表面にかか る不整凹み 5	一部有	裏表両面が部分的に摩滅して いる	4 ⊠75G
4	楕円形	13.6	8.9	4.7	780	,	3	片面中央	,	,	*	小さく浅い凹 みが数箇所	無	最大の凹みのみ断面逆円錐形 で他は浅い	4⊠14G
5	不整精円形	11.7	8.2	5, 2	685	*	2	両面中央	円形/楕円形	皿形	有	不整凹みが数 箇所	一部有	非常に軟質な石材	4 ⊠43G
6	楕円形	11.1	-8.1	2.8	400	砂岩	3	,	円形	皿形/逆円錐形	無	左右両側面に 傷	無	扁平で整った形状である	4 ⊠95G
7	不整楕円形	11.6	9. 2	5.2	755	硬砂岩	2	"	円形/楕円形	,	*	大きな傷が数 箇所	*	石材は硬質であり側面の傷は 強い打撃によると思われる	4⊠37G
8	,	10.0	5. 7	3.7	375	雨輝石安山岩	1	片面中央	不整形	皿形(剝離状)	*	片側全体が少 々摩滅		全体の形状は不整形で他とは 違った印象である	4⊠16G
9	楕円形	11.0	8.3	3.6	480	"	4	両面隅	,	*	,	一部に凹みあ り		裏表両面が非常に滑らか(摩 滅)だが側面には全くない	4 ⊠52G
10	円形	9.3	_	5. 4	550	"	0					全周に傷をも ち中央 稜 あり	*	裏表面は非常に滑らかだが 自然面の可能性あり ・	2⊠51G
11	棒状	12.3	4.5	3, 5	285	砂岩	0					左右両側面は 全体に傷つく	有	裏表両面の一部に引っ搔き傷 の様なものがある	4 ⊠35G

- 1 ~ 8 = 凹石、9 ~ 11 = 磨石
 単位はcm/g・() は残存値
 「凹みの数」に側面のものは含まない
 ここでいう「摩滅」は、表面が潰れて滑らかである状態をさす

以上のことより、本遺跡の凹石については②木の実割り具説(台石)に該当する可能性が高い。ただし、最も重要である「実験」という基礎作業に基づくものでないだけに根拠の乏しさは否めない。ここに提示した資料を観察しただけでもこれらを一様に捉えることは困難である。それは大まかに「楕円形」とされる以外、凹みの状況やアバタ痕の在り方、石質など多岐にわたり、その痕跡も併存している事例が多いことである。これは限られた作業に起因するのではなく、複数の機能(用途)を持っていたことを示すものであろう。それが各々別の目的によるのか、また単一の目的の中の作業工程によるものかは不明でありここでは言及できない。

図及び表の $9\sim11$ は磨石(すりいし)としたものである。磨石は通常「石皿」とセットとして捉えられ植物食の加工用具とされており、その摩滅面が一つのポイントと言える。9 は非常に顕著な摩滅を示し側面との境が弱い稜線として残る一方で剝離状の凹みが存在している。10は先にあげたアバタ痕が側面全周にわたって認められる。11はやはり側面のアバタ痕が顕著であるとともに引っ掻き傷のような細くて短い傷(深さは $0.1\sim0.5$ ミリ程ではっきりしている)が摩滅面の一部に認められる。また凹石とした1と3でも部分的に明確な摩滅面を持つことなどから、両者の機能においてもオーバーラップしており、その関連性を否定することは出来ないであろう。また、ここには挙げていないが、2 区17 グリッド遺物集中部で出土した「丸石」とした正球の遺物は明確な摩滅は認められないが、一部が剝離状に深く欠損するとともにその形状よりさきの両者とともに考えたほうがよいのではないか。

本項では遺物の観察のみによって思いつくままの記述に留まったが、先に述べたように実験を行なうことはもとより、遺跡及び伴出遺構での出土状況、また時期や地域における石器組成の中での在り方などを検討しなければならないことは言うまでもない。先に示した3説のいずれかであるならばある意味では当時の生活における基本的な要素と言えるだけに、様々な観点からのアプローチとともに資料の集積が望まれる。

〈参考文献〉

上野 佳也「石皿とくぼみ石」 日本考古学の視点「上」(日本書籍1978)

菊池 実「出土石器の検討 2 凹石」 田篠中原遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団1990)

斉藤 基生「植物調理用石器」 季刊考古学創刊号(雄山閣1982)

鈴木道之助「凹石・蜂の巣石」 図録 石器の基礎知識Ⅲ(柏書房1981)

中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」(1966)

野村 一寿「研究ノート・凹石研究のために一学史ー」 長野県埋蔵文化財センター紀要 1(1987)

町田 勝則「富山県における縄文後・晩期石器研究の現状と課題」長野県考古学会誌61・62号(1991)

〃 「福井県における縄文後・晩期石器研究の現状と課題」福井考古学会会誌第9号(1991)

渡辺 誠「植物食の重要性」 縄文時代の知識(東京美術1988)

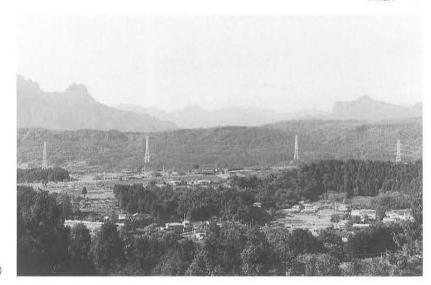
発掘調査報告書抄録

ふりがな	ひじしおしもはらいせき
書 名	土塩下原遺跡
副書名	
巻 次 次	
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書
シリーズ番号	⟨2⟩
編著者名	田口 修
編集機関	松井田町埋蔵文化財調査会
編集機関所在地	●379-02 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245
発 行 年	西暦1992年12月28日

所収遺跡名	所在地	コ - ド 市 町 村 遺跡番号	北 緯。,,,,	東 経。,,,,	調査期間	調査面積	調査原因
土塩下原遺跡	松井田町 松井田町 大字土塩	104019	36° 20′ 85″	138°46′50″	19910918— 19911115	895m²	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺	構	主 な 遺	物	特記事項
土塩下原遺跡	住居	縄文中期	竪穴住居跡	2 軒	土器、石器		
	包含層		集石	3基	,		
			炉 	1基			
			包含層	全域		•	

写 真 図 版



遺跡地遠景(北東より)

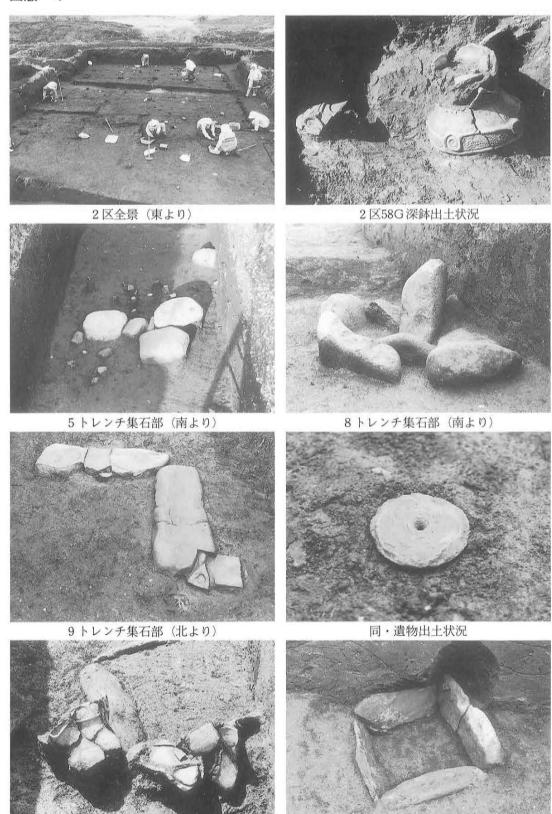


表土除去作業



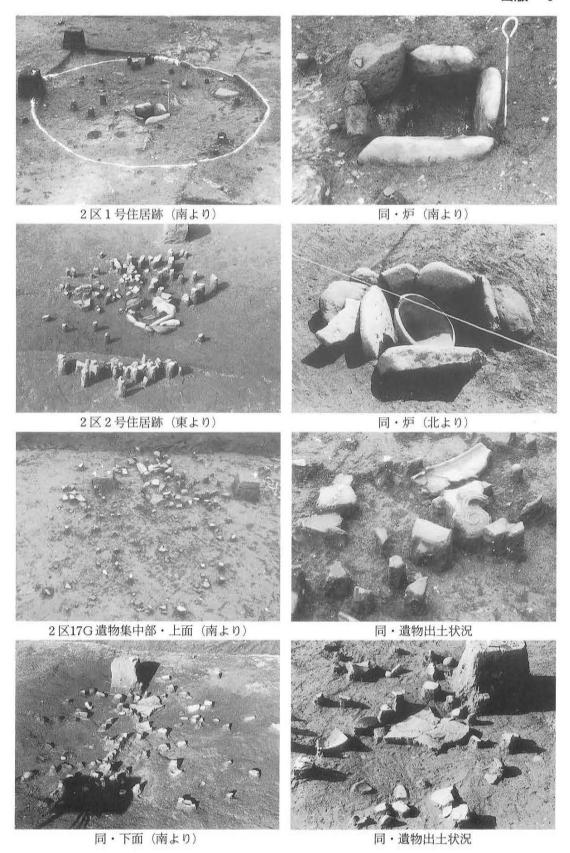
遺跡より東方を望む (手前は2区)

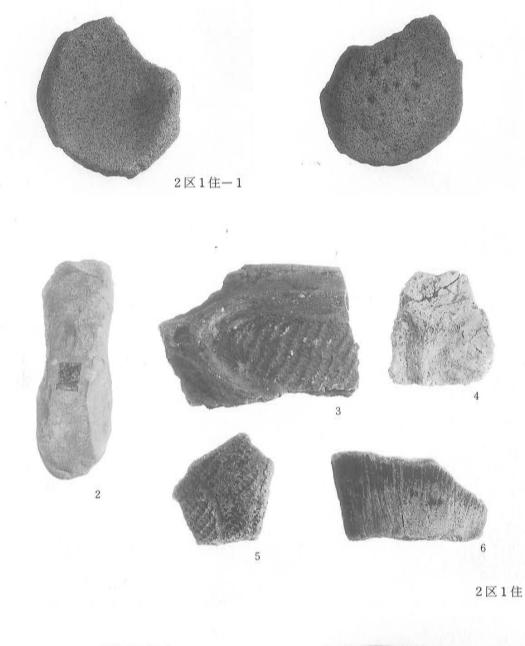
4区39G打製石斧出土状況



10トレンチ炉跡遺物出土状況(北より)

同・完掘状況 (東より)

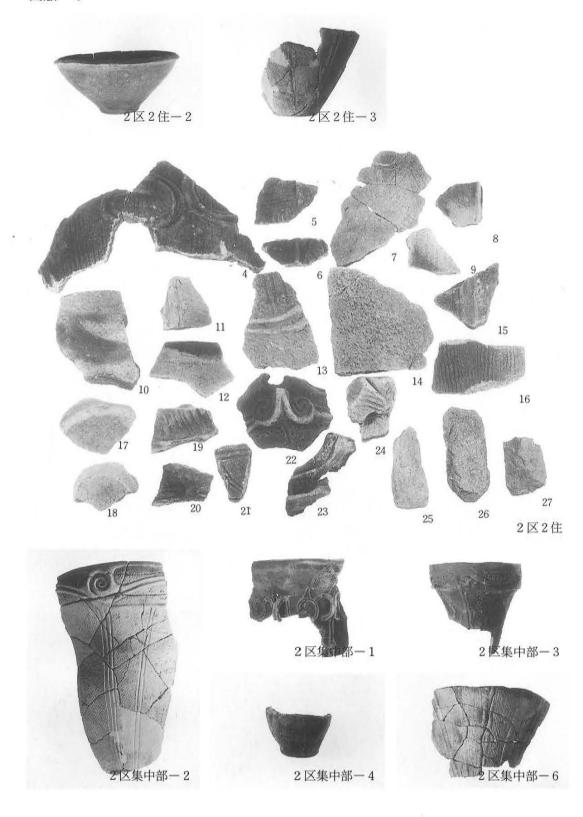




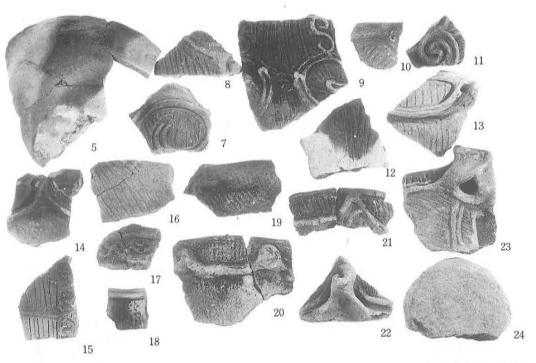


2区2住-1

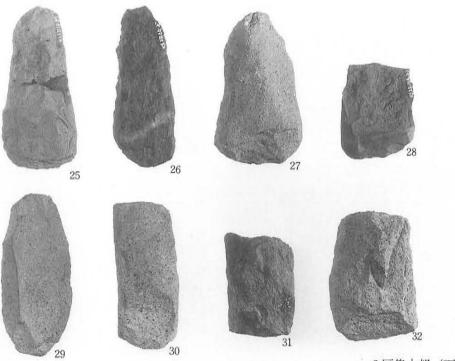








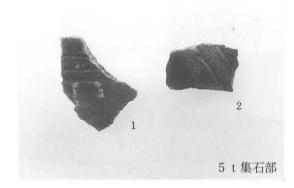
2 区集中部 (土器)

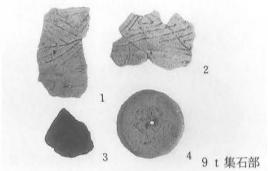


2 区集中部 (石器)

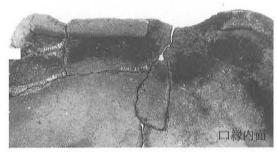


2区集中部一33



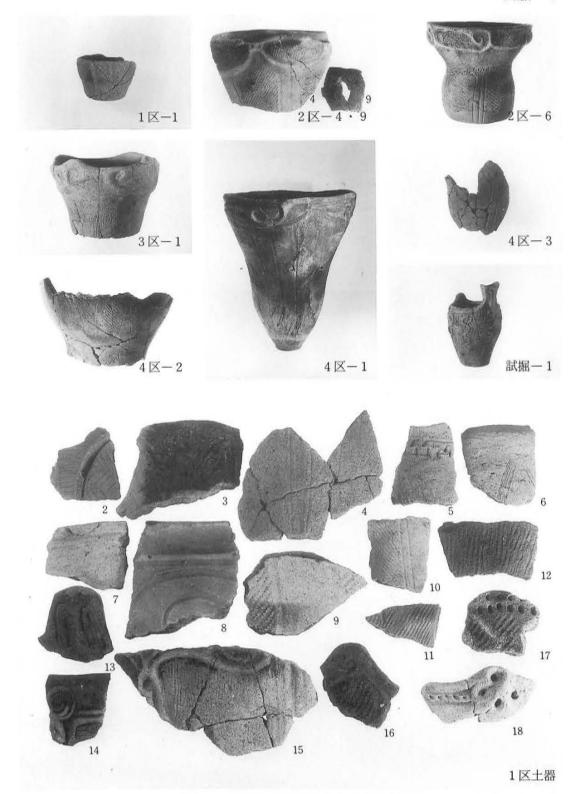


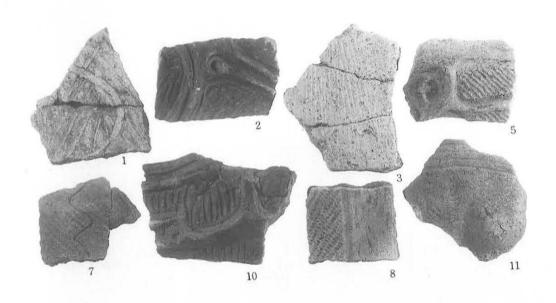




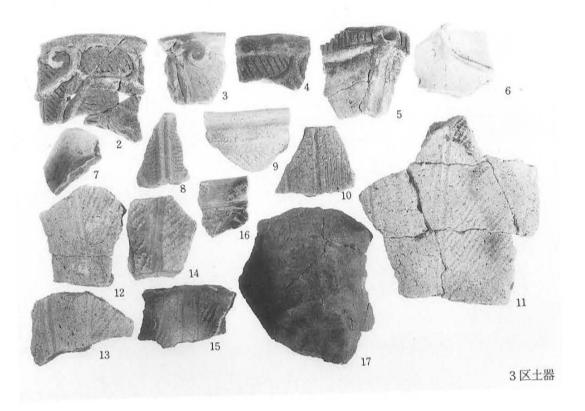


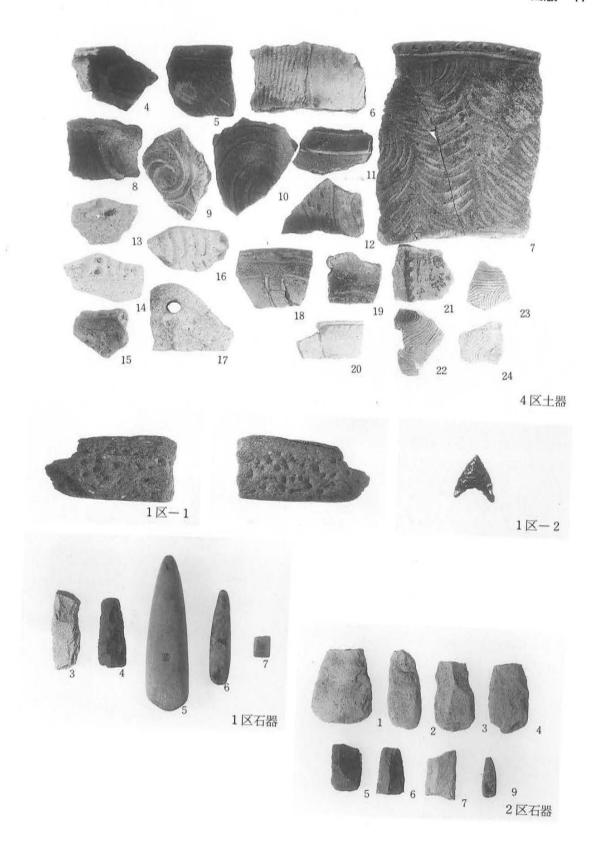


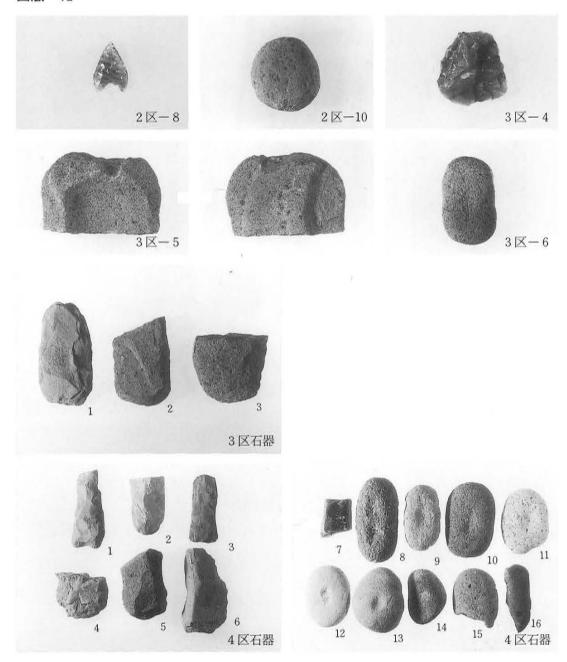




2区土器







松井田町埋蔵文化財調査報告書〈2〉

土塩下原遺跡

平成 4 年12月28日発行

編集・発行/松井田町埋蔵文化財調査会 (教育委員会内)

> 〒379-02 群馬県碓氷郡 松井田町新堀 245

TEL (0273) 93 - 1 1 1 1

印刷/碓氷印刷株式会社